

製 塩 遺 跡 I

(津 名 郡)

1 9 9 3 . 3

兵庫県教育委員会

はじめに

兵庫県には多くの遺跡があります。5つの国から成り、日本海・瀬戸内海と地域により文化が変化していることはよく知られていることです。また、地域により多種多様の遺跡が残されています。

兵庫県教育委員会では、文化庁の文化財補助事業として、すでに『兵庫県の諸職』として民俗学的なまとめを行いました。引き続いて考古学的な手法から生産遺跡の実態について基本的な調査を実施し、考えようとするものです。そのためにも詳細分布調査の一環として、昭和63年度から継続して生産遺跡の調査を行ってきました。生産遺跡とは、鉄・銅・塩・石・土器などの生産を行っている遺跡です。住居・墓などの生活に密着した遺跡とは異なり、当時の人々の生活の基盤となるもので、居住空間からは離れたところにも存在します。すでに調査を開始しました『鉄』に続いて『塩』の調査を行いました。

それらは万葉集や記紀にも記され、百人一首には「来ぬ人を松帆の浦の夕風に 焼くや藻汐の身もこがれつつ」と誦われています。また、平城京出土の木簡のなかに淡路から塩を運んだ記録が残されています。

今、淡路は本州四国連絡道路の建設をはじめ多くの開発が計画されています。しかし、それまでの淡路を育ててきた製塩遺跡という文化遺産を後世に伝えていくために調査を実施したものです。

今回、報告致しますのは平成2年度から平成4年度にわたって調査を実施した結果であります。今後も継続して各種の遺跡の調査を行い、報告書をまとめていきたいと考えています。

調査に際しましては、多くの方々のご協力をいただいたことに厚くお礼申し上げますとともに本報告書が活用されることを願います。

平成5年3月

兵庫県教育長

芦田 弘逸

例 言

1. 本書は、兵庫県津名郡で実施した製塩遺跡分布調査の報告書である。生産遺跡の分布調査の一環として行ったものである。
2. 調査は、平成2年度から平成4年度まで継続して、兵庫県教育委員会が調査主体となり、淡路考古学研究会・津名郡町村会の協力を得て実施した。
3. 本調査は、文化庁文化財関係国庫補助事業として実施した。
4. 本書で示す標高値は、各町設定のB.M.を主に使用した値である。また、方位は磁北である。
5. 遺構および遺物写真は、調査担当者が撮影したものである。
6. 執筆分担は本文目次のとおりで、編集は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が行った。
7. 表紙および見返しの図は兵庫県立歴史博物館所蔵の『製塩圖解』『日本山海名産圖繪』から使用させて戴いた。
8. 本報告にかかる遺物・資料などは、津名郡町村会・北淡町歴史民俗資料館で保管している。



第1図 津名郡の位置

兵庫県生産遺跡分布調査 製塩遺跡Ⅰ（津名郡）

本文目次

例言

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	深井…………… 1
2. 平成2年度調査経過	深井…………… 2
3. 平成3年度調査経過	渡辺…………… 3
4. 平成4年度調査経過	渡辺…………… 3
II. 位置と環境	伊藤…………… 5
III. 遺跡の分布状況（分布調査結果）	波毛……………
1. 研究小史	……………12
2. 分布調査の概要	……………15
3. 製塩遺跡	……………27
IV. 調査結果	
1. 浜田遺跡	渡辺……………29
2. 舟木遺跡	伊藤……………38
3. 小代呂遺跡	伊藤……………45
4. 今出川遺跡	波毛……………47
5. 楠本塩入遺跡	波毛……………48
6. 井上遺跡	波毛……………52
V. 淡路島の土器製塩実験について	永田……………54
VI. 淡路島および播磨地方の諸遺跡似寄り出土した製塩土器の胎土の化学分析	……………安田・金杉…57
VII. おわりに	波毛……………63

挿 図 目 次

第1図	津名郡の位置	
第2図	調査風景	2
第3図	調査風景	4
第4図	津名郡の主な遺跡分布図	7・8
第5図	淡路町遺跡分布図	16
第6図	東浦町遺跡分布図	18
第7図	北淡町遺跡分布図	19・20
第8図	一宮町遺跡分布図	22
第9図	五色町遺跡分布図	24
第10図	津名町遺跡分布図	26
第11図	浜田遺跡 調査風景	29
第12図	浜田遺跡の位置と確認調査実施地点	30
第13図	浜田遺跡 土層断面図	31
第14図	浜田遺跡 2G平面図・土層図	32
第15図	浜田遺跡 土器実測図(1)	35
第16図	浜田遺跡 土器実測図(2)	36
第17図	浜田遺跡 土器実測図(3)	37
第18図	舟木遺跡の位置	38
第19図	舟木遺跡 竪穴住居跡実測図	40
第20図	舟木遺跡 土器実測図	41
第21図	小代呂遺跡の位置	45
第22図	小代呂遺跡 土層断面図	46
第23図	小代呂遺跡 土器実測図	47
第24図	楠本塩入遺跡位置と調査地点	48
第25図	楠本塩入遺跡土層	49
第26図	楠本塩入遺跡 土器実測図(1)	50
第27図	楠本塩入遺跡 土器実測図(2)	51
第28図	井上遺跡 土器実測図	52
第29図	井上遺跡 土層断面図	53
第30図	製塩実験風景	54
第31図	製塩土器作り	54

第32図	製塩実験風景	55
第33図	製塩実験により作られた塩	55
第34図	製塩実験により作られた塩	55
第35図	製塩実験により作られた塩	56
第36図	かた塩	56
第37図	淡路島および播磨地方諸遺跡出土製塩土器の胎土の化学分析値分布図	61

表 目 次

第1表	津名郡の主な遺跡地名表	9
第2表	淡路町の分布調査結果表	15
第3表	東浦町の分布調査結果表	17
第4表	北淡町の分布調査結果表	21
第5表	一宮町の分布調査結果表	23
第6表	五色町の分布調査結果表	25
第7表	津名町の分布調査結果表	27
第8表	原子吸光分析における各元素の分析条件	58
第9表	淡路島および播磨地方諸遺跡出土製塩土器の胎土の化学分析値	59・60

図 版 目 次

図版1	淡路町	岩屋・松帆周辺	空中写真
図版2	北淡町	野島江崎周辺	空中写真
図版3	北淡町	野島葦浦周辺	空中写真
図版4	北淡町	富島周辺	空中写真
図版5	東浦町	楠本周辺	空中写真
図版6	五色町	都志周辺	空中写真
図版7 (上)	淡路町	岩屋海岸	
(下)	北淡町	江崎海岸	
図版8 (上)	北淡町	野島海岸 (貴船神社前遺跡)	
(下)	北淡町	育波海岸	
図版9 (上)	東浦町	浦川	

- (下) 東浦町 今出川河口付近
- 図版10 (上) 一宮町 江井海岸
(下) 五色町 都志海岸
- 図版11 (上) 津名町 埋め立て地付近
(下) 津名町 佐野海岸
- 図版12 (上) 五色町 鳥飼海岸
(上) 五色町 五色浜
- 図版13 (上) 浜田遺跡 全景
(下) 浜田遺跡 1 グリッド
- 図版14 (上) 浜田遺跡 2 グリッド 北壁
(下) 浜田遺跡 2 グリッド 全景
- 図版15 (上) 浜田遺跡 出土土器
(下) 浜田遺跡 出土土器
- 図版16 (上) 浜田遺跡 出土土器
(下) 浜田遺跡 出土貝類
- 図版17 (上) 舟木遺跡 全景
(下) 舟木遺跡 住居跡
(上) 舟木遺跡 住居跡
- 図版18 舟木遺跡 出土土器
- 図版19 (上) 小代呂遺跡 全景
(下) 小代呂遺跡 出土土器
- 図版20 (上) 今出川遺跡 全景
(下左) 今出川遺跡 分布調査風景
(下右) 今出川遺跡 出土土器
- 図版21 (上) 楠本塩入遺跡 全景
(下) 楠本塩入遺跡 全景
- 図版22 (上) 楠本塩入遺跡 堆積状況
(下) 楠本塩入遺跡 出土土器
- 図版23 (上) 楠本塩入遺跡 出土土器
(下) 楠本塩入遺跡 出土土器
- 図版24 (上) 井上遺跡 全景
(下) 井上遺跡 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

兵庫県は北は日本海、南は瀬戸内海や太平洋に面し、各時代を通じて海とは密接な関係をもっていた。このことは兵庫県各地に塩づくりに関する遺跡が存在することを意味する。

淡路島は瀬戸内の東端に位置する瀬戸内海最大の島で、周囲を海で囲まれている関係上、古来より海とかわり合いが強く、人々の生活にも今もなおいきづいている。例えば『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの古来からの史料や歌などに記されており、『万葉集』巻6に、神亀3年秋9月、聖武天皇が播磨国印南郡に行幸した際、笠朝臣金村が長歌として作った「名寸隅の船瀬ゆ見ゆる淡路島松帆の浦に朝風に玉藻刈りつつ夕風に塩焼きつつ海少女ありとは聞けど見に行かむ縁のなければ大夫の情は無しに手弱女の思ひたわみて徘徊りわれはそ恋ふる船揖を無み」がある。また藤原定家は百人一首で「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻汐の身もこがれつつ」と歌っている。その他、平城京から出土した木簡の中には、天平宝字五年（761年）に「調」として塩を淡路国三原郡阿麻郷から都に送られた付札が出土している。

さて兵庫県教育委員会では従来から市や町単位で詳細な遺跡分布調査を実施し、緊急な開発等に対する対応を速やかに行えるよう指揮してきた。その結果は文化庁発行の「全国遺跡地図」28兵庫県（昭和57年5月20日）や市町独自の分布地図として出版されている。全国遺跡地図では淡路島の製塩遺跡はわずか11箇所が知られているのみである。この製塩遺跡とは製塩に関する遺物（主に製塩土器）が出土した遺跡を指すもので、必ずしも製塩関連遺構が検出されたものではない。これまで製塩土器等が発掘調査された島内の遺跡は、洲本市山下町居屋敷遺跡（古墳時代）や同市下内膳遺跡（平安時代）、津名郡東浦町楠本塩入遺跡（古墳時代）、同町佃遺跡（平安時代）、津名郡北淡町舟木遺跡（弥生～古墳時代）など十数例あるだけで遺物量から見ても未だ発見されていない重要な遺跡が存在することは容易に推察できる。

淡路島は近年、近隣各府県の埋立に要する土砂の供給地であり、しかも本州四国連絡道の明石海峡大橋の開通を見越した、リゾート等の大規模開発も多数計画されている。今回の分布調査はこれらの開発事業から淡路島の海浜部に存在する製塩等に関する遺跡を保護することから早急に遺跡を把握する必要性があった。

現在、兵庫県教育委員会では国庫補助事業として、佐用郡に引き続き、宍粟郡の製鉄関係の生産遺跡分布調査を実施しているところであるが、このたび淡路島の製塩遺跡を把握すべく分布調査を実施することとなった。なお製鉄・製塩をはじめ、製鉄以外の金属や窯業及び石器や石造品の素材となる岩石等も、今後兵庫県全域を対象として分布調査を行う予定である。

2. 平成2年度の調査経過

平成2年度は分布調査の初年度にあたり、調査主体と総括事務は兵庫県教育委員会が担当し現地調査にあたっては淡路考古学研究会をはじめ津名郡町村会、関係各町教育委員会の多大なる協力のもとで実施された。この初年度の調査計画は、津名郡内の津名町、淡路町、北淡町、東浦町の海浜部全域を対象としたが、時間的な制約もあり、東浦町全域と北淡町の一部を調査したにとどまった。

調査の方法としては海浜部を主体にくまなく踏査し、製塩土器だけでなく、須恵器・土師器等の遺物の分布状況を地図に記入し、カード化していった。

東浦町は淡路島の東海岸の大阪湾に面しており、製塩遺跡として周知されている楠本塩入遺跡などを中心として全町域を踏査した。その結果、砂浜を伴う海浜部に弥生土器・土師器・須恵器を中心に27箇所の遺跡の分布を確認した。その中で楠本塩入遺跡の他に、平松B遺跡と引野C遺跡から製塩土器を採集した。これらは東浦町の楠本のみでなく浦や久留麻など全町域にわたって製塩遺跡が点在する可能性を示唆するものとなった。

また遺跡の分布は砂浜を伴う海浜部に集中しており、製塩土器が採集されていない遺跡においても今後、生産に係わる遺跡になる可能性は大きい。

北淡町は淡路島の西海岸の播磨灘に面する海浜部に位置する。この町内に以前から個人住宅等の建設に伴って奈良時代の製塩土器が採集されていた育波浜田遺跡があり、今回小規模な発掘調査を予定していたが、時間的な制約もあり、2年度は町内の北半分にあたる江崎から轟木までの間を踏査したにとどまった。

その結果、北淡路の山塊が海岸に迫る狭い斜面地ではあるが、18箇所の遺跡の分布を確認した。その中の平林の貴船神社遺跡では遺物包含層が発見され、弥生中期土器及び土師器と共に製塩土器が採集された。これらの踏査の結果は今まで不明であった北淡町の北部海浜部の製塩遺跡の発見につながり、さらに集落遺跡の存在も明らかになった。今後北淡町南部の分布調査の実施によって、さらに多くの製塩遺跡等の遺跡の存在が確認されることになろう。



第2図 調査図景

3. 平成3年度の調査経過

平成3年度は前年度に引き続いて、北淡町の調査を継続した。北淡町は津名郡で最も海岸線の長いところで、予想以上に時間を費やした。当初、北淡町の分布調査を終えて、一宮町・五色町の調査を行う予定であったが、すべてを消化することは出来なかった。北淡町は海岸線が長いうえに、海岸に接した水田部分も多く、調査対象地が広がったためである。しかし、それなりの成果は上げたものと思われる。遺物採集地点は30数箇所であったが、大半は散布地であった。また、丘陵上には弥生土器・中世の土器が採集され、遺跡の広がりが予想された。

五色町の調査では、想像していた数より僅少な遺跡の確認に終わった。特に、北側の都志地区では、遺跡はほとんど確認されなかった。鳥飼地区に入って、徐々に遺物が採集され、遺跡が確認されるようになったが、当初の予想を大きく下回った結果であった。

今年度は、昨年度と異なり分布調査以外に遺跡の範囲確認調査を実施した。すでに製塩遺跡として知られていた北淡町の浜田遺跡を対象とした。僅か4日の調査であったが、大きな成果を上げることが出来た。遺跡の内容がはじめて理解出来る調査となった。そして、併せて遺跡の広がりがある程度予想されたことは大きな成果であろう。

確認調査終了後、遺物の整理作業に入った。兵庫県立津名高等学校と兵庫県教育委員会に分けて作業を行い、水洗い・注記作業から接合・実測までの大半の作業を行った。

4. 平成4年度の調査経過

平成4年度は、津名郡の調査の最終年度として、残りの地域の分布調査を実施した。津名町・一宮町の順で調査を行った。今年度は淡路での開発やそれに先立つ分布調査が多く、十分に調査を行う時間がなかなか見出せなかったため、冬期に集中して実施した。それと平行して報告書作成作業も行った。

津名町は、埋め立てが進んでいることから、遺跡はほとんど存在していないと思われたが、海岸部や旧海岸線付近で遺跡が認められた。

一宮町の海岸線のうち南側は、岩礁部が多くあり遺跡はほとんど存在しなかった。ただ、細かな調査を行うと遺跡が確認される可能性も考えられえる。

整理作業は、分布調査と平行して実施した。一部は津名郡町村会で行い、他は兵庫県教育委員会で行った。主に津名郡町村会で数度となく調査担当者間で打合せを行った。

なお、淡路島を中心として製塩土器の分析を武庫川女子大学薬学部安田博幸教授・同金杉直子助手にお願いした。その分析結果について玉稿を戴いた。謝意を表します。

平成2年度から3か年にわたっての調査で、多くの方々の教示・指導を得るとともに、多数

の方々に協力を得ました。感謝します。

調査協力・指導

岡本 稔（淡路考古学研究会）・安田博幸・金杉直子（武庫川女子大学薬学部）
浜西和昭（浜田遺跡土地所有者）・岡田章一（兵庫県立歴史博物館）
浦上雅史（洲本市教育委員会）・池尾 勝（北淡町教育委員会）
市村高槻（龍野市教育委員会）
淡路町教育委員会・北淡町教育委員会・東浦町教育委員会・津名町教育委員会
一宮町教育委員会・五色町教育委員会・津名郡町村会・波賀町教育委員会

調査担当者

平成2年度

波毛康宏・永田誠吾・和田知子（淡路考古学研究会）
伊藤宏幸（津名郡町村会） 深井明比古（兵庫県教育委員会）

平成3年度

波毛康宏・永田誠吾・和田知子・二坪晃正（淡路考古学研究会）
伊藤宏幸（津名郡町村会） 渡辺 昇（兵庫県教育委員会）

平成4年度

波毛康宏・永田誠吾・和田知子・二坪晃正（淡路考古学研究会）
伊藤宏幸（津名郡町村会） 渡辺 昇・岸本一宏（兵庫県教育委員会）

調査参加者

西江昭俊・兵庫県津名高等学校社会科研究部
河野奈恵美・坂本いづみ・黒田照代・久保典子
社領育代・前田陽子・伴 悦子



第3図 調査風景

Ⅱ. 位置と環境

淡路島は、瀬戸内海の東端に位置し、東を大阪湾、西を播磨灘に面している。さらに、北は明石海峡、南は鳴門海峡と、いずれも潮流の激しい狭い海峡を挟んで本州・四国と対峙し、古くから東西の海上交通路の要衝に位置していたものと思われる。津名郡は、この淡路島北半を占有し、現在の行政区画で言うところの津名町、東浦町、淡路町、北淡町、一宮町、五色町の6町により構成されている。

島の地形は北部と南部で異なり、津名郡が位置する北淡路は主に六甲山地から連なる領家花崗岩類の岩体によって形成される山地と、この山地の谷間を埋積するように覆っている大阪層群によって形成された丘陵とによって構成されている。山地と丘陵部を境する位置には活断層の存在が認められ、地形発達に大きな影響を及ぼしている。津名郡内においては、山地及び丘陵部が海岸線にまで迫りそのまま海に落ち込む箇所も多い。さらに丘陵部から流れ出す河川はいずれも急勾配で短いものが多いために大きな平野の発達はみられず、小規模な平野が数箇所存在するのみである。ただ、丘陵部が比較的なだらかな形状のため、丘陵上に点在する小盆地や樹枝状谷を中心とした土地利用が山地、丘陵上にまで広く及んでいる。⁽¹⁾

このような土地利用は今も昔も大差はないようで、郡内における遺跡の立地がそれを物語っている。

津名郡内において周知されている遺跡は約250箇所を数える。そのうち、郡内最古の遺物は有舌尖頭器で、現在のところそれ以前の旧石器時代の遺跡は確認されていない。これらの有舌尖頭器はすべてサヌカイト製で、小型のものがほとんどである。現在のところ淡路町1、北淡町2、五色町1の合計4点が確認されており、北淡町舟木遺跡で弥生時代の溝から出土した1点以外はすべて採集資料であって、その他の遺物や遺構を伴う遺跡は発見されていない。

縄文時代の遺跡については、東浦町において調査が進んでおり、早期の山形・楕円押型文土器が多量に出土している釜口船頭ケ内遺跡、前期から晩期にかけての幅広い時期の遺物が出土し、特に後期、晩期を中心とする集落の様相が明らかになった佃遺跡、前期から中期の楠本下林遺跡などで発掘調査が実施されている。このほか、中期を除く早期から晩期にかけての土器が採集され、さらに弥生時代にまで継続することが知られている北淡町育波堂の前遺跡をはじめ、前期から晩期の淡路町ナキリ遺跡、前期の津名町視遺跡、中期の五色町奥の下遺跡、晩期の淡路町給田遺跡、大谷川遺跡などでも土器片が採集されている。⁽²⁾

弥生時代に入ると遺跡数は増加するもののほとんどが後期の遺跡であり、前期・中期の遺跡数はきわめて少ない。また、淡路島の弥生時代を特徴づける銅鐸等の青銅器類についても、一宮町江井崎出土と伝えられる尼崎市本興寺所蔵の銅鐸1点が津名郡内出土の可能性のある⁽³⁾のみで、多量の青銅器類が出土している三原郡とは対称的な様相を呈する。

前期の遺跡として確認されているのは、東浦町今出川遺跡、佃遺跡、北淡町育波堂の前遺跡であるが、いずれも数点の土器片が出土している⁽⁴⁾にすぎない。さらに、中期前半から中頃にかけての様相も同様で、東浦町佃遺跡で中期中頃の土器の出土が知られている⁽⁵⁾のみである。しかし、中期末から後期にかけて遺跡数は爆発的に増加し、特に後期については各町で数多くの遺跡が確認されている。その数は約70箇所を数える。しかも、これら後期遺跡の大半が標高100mを越える丘陵上に位置しているのが特徴的で、そのような立地にもかかわらず舟木遺跡や久野々遺跡などに代表されるように大規模な面積を有するものも存在する。このうち舟木遺跡では、ほ場整備事業に伴う発掘調査が実施されており、環濠状の大溝や多数の竪穴住居跡が検出されるなど集落の様相が明らかになりつつある。また、舟木遺跡で検出された竪穴住居跡のひとつからは56個体を数える製塩土器が出土し、生産地と消費地間での塩の流通を考える貴重な資料として注目されている。これらの後期の遺跡は数地区で集中する箇所がみられ、津名町中田地区、東浦町河内地区、淡路町岩屋地区、北淡町仁井地区、生田地区などに集中している。このような遺跡も次の古墳時代にまで継続するものは無く、津名丘陵上の人々の生活の痕跡は弥生時代の終焉とともに急速に減少してゆくことになる。

津名郡内における最古の製塩土器は、東浦町今出川遺跡で採集されている資料がそれで、ほ場整備の工事中に1点だけ発見されている。この土器はほぼ完形に復原し得るもので、脚台が付きシリンダー状の細長い胴部をもつタイプで、弥生時代後期のものとされている。⁽⁶⁾

古墳時代の遺跡については調査例が少ないために不明な点が多く、集落の様相が解明された遺跡は、津名町の畦ヶ内遺跡で古墳時代初頭の竪穴住居跡が1棟検出されている⁽⁷⁾のが唯一で、それ以外は明らかでない。このほか、現在知り得る遺跡は再び低地に位置するものが中心で、特に海岸線の製塩遺跡の存在が注目されるようになる。大阪湾に面する東浦沿岸では、東浦町井上遺跡、楠本塩入遺跡、平松遺跡、萱野遺跡、播磨灘に面する西浦沿岸では、北淡町小代呂遺跡、浜田遺跡、浜遺跡などが代表的な遺跡であるが、古墳時代前期の脚台付き製塩土器が出土している小代呂遺跡⁽⁸⁾、薄手精製小型で丸底のコップ形を呈する製塩土器が出土している東浦町井上遺跡⁽⁹⁾を除けばすべてが厚手粗製で丸底の椀型を呈する製塩土器が出土する遺跡であり、これらは古墳時代後期のものと考えられている。津名郡内では、この時期に急速に製塩遺跡の規模が大きくなり、1遺跡から出土する土器量もおびただしく増加する。

淡路島における古墳の数は他地域と比較して非常に少ないことが指摘されているが、津名郡内においてはその傾向がさらに顕著である。現在確認されている古墳は、津名町1基、東浦町0、淡路町2基、北淡町4基、一宮町12基、五色町4基、合計23基で、前述の弥生時代後期の状況に比べて対称的である。これらの古墳は西浦沿岸に集中する傾向がみられ、東浦沿岸には津名町の奥穴見古墳1基が知られるのみである。また、これらすべてが小規模な後期古墳であり、前期、中期の古墳は皆無である。さらに、前方後円墳については津名郡内はもとより、淡

第4図 津名郡の主な遺跡分布図



第1表 津名郡の主な遺跡

津名町

番号	遺跡名	種別	時代
T-1	視遺跡	包蔵地	縄文
T-2	神原遺跡	包蔵地	弥生
T-3	本田谷遺跡	包蔵地	弥生
T-4	品ヶ谷遺跡	包蔵地	弥生
T-5	江原遺跡	包蔵地	弥生
T-6	かじゃくほ遺跡	包蔵地	弥生
T-7	油留手遺跡	包蔵地	弥生
T-8	王子遺跡	包蔵地	弥生
T-9	奥穴見古墳	古墳	古墳
T-10	畦ヶ内遺跡	集落址	古墳
T-11	志筑廃寺遺跡	寺院址	奈良
T-12	臨池庵池遺跡	散布地	奈良
T-13	田井遺跡	包蔵地	中世

東浦町

番号	遺跡名	種別	時代
H-1	釜口船頭ヶ内遺跡	包蔵地	縄文～
H-2	佃遺跡	集落址	縄文～
H-3	楠本下林遺跡	集落址	縄文～
H-4	白山真土遺跡	集落址	弥生～
H-5	尼ヶ岡遺跡	集落址	弥生
H-6	禿山遺跡	集落址	弥生
H-7	今出川遺跡	包蔵地	弥生
H-8	楠本塩入遺跡	製塩	古墳
H-9	平松遺跡	製塩	古墳
H-10	萱野遺跡	製塩	古墳
H-11	井上遺跡	製塩	古墳
H-12	猪ノ尻遺跡	集落址	平安

淡路町

番号	遺跡名	種別	時代
A-1	給田遺跡	包蔵地	縄文～
A-2	ナキリ遺跡	包蔵地	縄文～
A-3	大谷川遺跡	包蔵地	縄文
A-4	サセブ遺跡	包蔵地	弥生
A-5	土穴遺跡	包蔵地	弥生
A-6	岡山遺跡	包蔵地	弥生
A-7	まるやま遺跡	包蔵地	弥生～
A-8	塩壺西遺跡	集落址	弥生
A-9	石の寝屋古墳	古墳	古墳

北淡町

番号	遺跡名	種別	時代
D-1	堂の前遺跡	包蔵地	縄文～
D-2	机遺跡	包蔵地	弥生
D-3	舟木遺跡	集落址	弥生
D-4	尾花遺跡	包蔵地	弥生
D-5	上ノ開地遺跡	包蔵地	弥生～

D-6	穴郷遺跡	包蔵地	弥生～
D-7	久野々遺跡	集落址	弥生
D-8	おぎわら遺跡	集落址	弥生
D-9	雨堤遺跡	包蔵地	弥生
D-10	金坪遺跡	包蔵地	弥生
D-11	色目遺跡	包蔵地	弥生
D-12	上条遺跡	包蔵地	弥生
D-13	鑄文字原遺跡	包蔵地	弥生
D-14	小代呂遺跡	製塩	古墳
D-15	貴舟神社前遺跡	製塩	古墳
D-16	浜田遺跡	製塩	古墳
D-17	浜遺跡	製塩	古墳
D-18	築鼻古墳	古墳	古墳
D-19	林古墳	古墳	古墳
D-20	外町遺跡	集落址	中世
D-21	掛内遺跡	集落址	中世
D-22	小田館	城館	中世

一宮町

番号	遺跡名	種別	時代
M-1	大木谷遺跡	散布地	縄文
M-2	江井崎遺跡	銅鐸	弥生
M-3	小丸古墳	古墳	古墳
M-4	枯木古墳	古墳	古墳
M-5	大木谷古墳	古墳	古墳
M-6	山門古墳	古墳	古墳
M-7	郡家古墳	古墳	古墳
M-8	寺山古墳	古墳	古墳
M-9	明神古墳群	古墳	古墳
M-10	福満寺石棺蓋	石棺	古墳
M-11	郡家長谷遺跡	包蔵地	奈良
M-12	尾崎堂ノ鼻遺跡	集落址	中世
M-13	妙暁寺址	寺院址	中世

五色町

番号	遺跡名	種別	時代
G-1	奥の下遺跡	散布地	縄文
G-2	みのこし遺跡	包蔵地	弥生
G-3	大崩遺跡	包蔵地	弥生
G-4	喜住遺跡	包蔵地	弥生
G-5	築穴古墳	古墳	古墳
G-6	愛宕山古墳群	古墳	古墳
G-7	都志石櫃	石棺	古墳
G-8	角床古窯址	古窯址	奈良
G-9	奥の池古窯址	古窯址	奈良
G-10	鳥飼八幡宮遺跡	包蔵地	平安～
G-11	岡ノ山遺跡	集落址	中世
G-12	白巢城址	城館	中世

路島内においても1基も確認されていない。

律令期に入ると、「淡路」は島全体が南海道の内の一国とされ、国内は「津名」「三原」の二郡に分けて統治されるようになる。このうち「津名」郡は十郷に分かれ、現在の行政区画で言うところの津名郡には、「志筑郷」「来馬郷」「育波郷」「郡家郷」「都志郷」の5郷が存在したことが知られている。「津名」郡衙は地名などから一宮町郡家に置かれたと想定されるが、現在のところその場所は特定されていない。

この時期の遺跡としては、淡路島最古の瓦が採集されている津名町の志筑廃寺が注目される。志筑廃寺では、重圈文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦など白鳳期の瓦が採集されている⁽¹⁰⁾が、遺構や伽藍配置などの実態は明らかでない。また、五色町堺地区では8世紀中頃から末にかけての古窯址の存在が知られており⁽¹¹⁾、律令期に於ける淡路島内での須恵器供給の一翼を担ったものと考えられる。現在は、角床古窯址2基、奥の池古窯址1基の存在が確認されているが、調査が進めばその数はさらに増加する可能性がある。このうち、角床古窯址では丘陵斜面で窯体の一部が観察できる。このほか、北淡町斗の内地区では、ほ場整備事業に伴う確認調査で黒色土器とともに土墾や柱穴などの遺構が検出されており、平安期の遺跡と考えられている。

律令期に於ける製塩遺跡の実態は津名郡においてはまだ十分に解明されていない。現在のところ奈良時代以降の製塩遺跡は確認されておらず、古墳時代に操業されていた製塩遺跡も奈良時代以降に継続する遺跡は認められない。三原郡内においては、西淡町谷町筋遺跡⁽¹²⁾や鉾田遺跡⁽¹³⁾などでこの時期の製塩土器の出土が知られているほか、洲本市でも里池遺跡⁽⁸⁾から奈良時代の製塩土器が出土しているが、これらはすべて内陸部の遺跡であり、生産に関する遺跡については明らかになっていない。

中世の遺跡では、近年集落址を中心とした調査が増加しており、東浦町佃遺跡、藤の木遺跡、一宮町尾崎堂ノ鼻遺跡、中須賀遺跡、北淡町外町遺跡、掛内遺跡、井の谷遺跡、五色町岡ノ山遺跡などで発掘調査が実施され、その実態が明らかにされつつある。また、中世城館も郡内で約50箇所が存在が知られている⁽¹⁴⁾が、大規模なものではなく、しかも後世の削平を受け依存状態も良くないものが大半である。そんななかで、土塁が一部残存している北淡町の小田館、曲輪の状況が比較的明らかな五色町の白巢城などが代表的なものである。

註(1)樽野博幸「地形と地質」『津名町史』津名町 1988

稲田卓史「地形と地質」『五色町史』五色町 1986

高橋浩ほか『洲本地域の地質』地域地質研究報告 高地※第11号 地質調査所 1992

(2)石野博信『縄文時代の兵庫』 1979

岡本稔「淡路島の遺跡概観」『月刊 歴史手帳』第5巻7号 名著出版 1977

波毛康宏「津名町の考古遺跡・遺物」『津名町史』津名町 1988

〃 「考古学上の遺物・遺跡」『五色町史』五色町 1986

- (3)櫃本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社 1984
- (4)岡本稔「淡路島の遺跡概観」『月刊 歴史手帳』第5巻7号 名著出版 1977
松下勝ほか「北淡路の遺物」『兵庫考古』第9号 兵庫考古研究会 1980
佃遺跡については深井明比古氏のご教示による。
- (5)深井明比古氏のご教示による。
- (6)岡本稔氏のご教示による。
- (7)波毛康宏「津名町の考古遺跡・遺物」『津名町史』津名町 1988
- (8)浦上雅史「淡路島の海の生産用具」『歴史と神戸』第143号 神戸史学会 1987
- (9)波毛康宏氏のご教示による。
- (10)岡本稔「志筑廃寺」『津名町史』津名町 1988
- (11)浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 淡路考古学研究会 1980
- (12)吉識雅仁ほか『谷町筋遺跡』兵庫県教育委員会 1990
- (13) 〃 「鉦田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会 1986
- (14)今井林太郎ほか『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会 1982

Ⅲ. 遺跡の分布状況（分布調査結果）

1. 研究小史

淡路の製塩土器研究は、岡本稔氏によってはじめられた。淡路地方史研究会の会誌第7号（昭和45年発行）に「淡路島の土器製塩遺跡」として研究の成果がまとめられている。

それより以前、岡本稔氏は、昭和35年、淡路ではじめての製塩遺跡として洲本市由良の高崎遺跡が発見されて以来、研究されての発表である。やがて、岡本氏宅を訪れた石部正志・白石太一郎氏らが淡路の製塩遺跡を実地見学し、遺物を観察して、昭和41年に、石部正志氏が、日本考古学協会の子報に「淡路島の土器製塩」として発表された。石部氏の形式分類は次のとおりである。

I類 小形倒杯形台脚を有する形態

宮崎遺跡のタイプ -脚底の凹みが顕著でなく、胴部が細く急角度で立ち上がり、外面の叩き目がはっきりしている。（紀伊半島の目良B類土器に類似） -弥生後期

高崎遺跡タイプ -若狭浜の浜禰I式に似る -古式土師器・I類の須恵器伴出

II類 丸底と推定される薄手の粗製土器

外面に深い叩き目がみられる（瀬戸内の喜兵衛島と似る）

III類 丸底で薄手の粗製土器

叩き目が浅くてはっきりしないものやそれと認められないもの

極めて薄手で軽金属的な質感を有するものも含める。

IV類 厚手粗製の土器（若狭湾の船岡式に類する）

II類・III類・IV類は、土師器・III類の須恵器を伴出しているので、古墳時代後期になる。

岡本氏は、石部氏の分類に従って、前述の発表の中で、淡路島の製塩遺跡11遺跡を紹介している。

洲本市 高崎遺跡 I類・III類（土師器・須恵器伴出） 三ツ川遺跡 III類・IV類（土師器・須恵器伴出） 宮崎遺跡 I類（弥生後期の土器伴出） 山下町遺跡 III類 石ヶ谷遺跡 I類・II類・III類・IV類 名子の浜遺跡 I類・III類（須恵器伴出） 東浦町 平松遺跡 III類 塩入り遺跡 III類（須恵器伴出） 北淡町 阿弥陀堂墓地遺跡（仮称） III類 南淡町（沼島） 本村遺跡 I類・II類・III類（土師器・須恵器伴出） 大水浦遺跡 IV類（土師器・須恵器伴出）

以上、北淡路の東浦に2遺跡、西浦に1遺跡、洲本市に5遺跡、沼島に2遺跡を紹介して、次のようにまとめている。

「淡路島及び沼島の土器製塩遺跡を概観すると、極めて小規模な海浜に立地している所が11

箇所の遺跡の中、8箇所もある。この中の三ツ川遺跡、大水浦遺跡を除いて、いずれもⅠ類の製塩土器が出土していて、それが淡路島南部に多いことなど、一応は注意されるべきであると思う。」

次に、昭和48年12月27日・28日に発掘調査された旧城内遺跡の報告を

田村昭治氏が昭和49年5月発行の『淡路考古学研究会誌』第2号で「旧城内遺跡」として報告されている。

同報告によると、焼石群が検出されたが、製塩炉址とは断定できなかった。しかし、採集した製塩土器は脚台つきのもので、田村氏は、脚台の形状から次のように3つに分類している。

- 1 底部が床面に密着する平底 -11個体分 (15.9パーセント)
- 2 やや凹み気味のあげ底 -21個体分 (30.4パーセント)
- 3 弧状に凹んだあげ底 -37個体分 (53.6パーセント)

また、同氏は、胴部つけ根から身部に移行する器壁の立上り角度の計測によって75度前後が最も標準的なものとし、目良B類に似た形状としている。

なお土器の胎度は砂粒を含み、外面は叩き目のものと、叩いて整形したあとヘラで調整したものがあり、指頭による成形のものもみられる。器壁の内部は底をヘラ状またはハケ状のもので整形しているとしている。

昭和49年12月20日から31日まで発掘調査された山下町居屋敷遺跡の報告書（昭和52年3月発行）で田村昭治氏は「淡路島の製塩土器について」と題して、19遺跡について前述の石部氏・岡本氏の研究にしがたがって、淡路の製塩土器の型式分類を試みている。

台底をもつもの（台付鉢型土器）

- A類 脚台部の脚の長い形式（名子の浜・石ヶ谷遺跡）
- B類 底部内面の凹みが少なく、体部は立ち上りが急で、円筒状を呈する。体部全面に大きい深い叩き目（宮崎遺跡）
- C類 底部はおおむね倒杯状で、外面は叩き目を持つ。体部の立ち上がりは急で、コップ状を呈する。目良B類のタイプ（旧城内遺跡）
- D類 脚台部のつくりは小型化し、脚底部の凹みは完全な倒杯形。体部はゆるく立ち上がりつつ、朝顔状に開く。（高崎遺跡・山下町居屋敷A地点）

A類を弥生中期、B類を弥生後期、C類を4～5C代（古墳時代前期）、D類を5C代（古墳時代中期）としている。

丸底のもの

- E類 尖底の類型（山下町居屋敷遺跡A地点）
- F類 尖底気味の丸底鉢形（高崎遺跡・名子の浜遺跡・山下町居屋敷遺跡A地点）
- G類 丸底鉢形。砂粒を多く含み、内面ナデ調整、外面は粘土帯積み上げ技法による継目が

未調整のまま残っており、指掌による押圧痕が全面につく。

田村氏は、丸底のE類は山下町居屋敷A地点の1箇所のみなので、問題を含んでいるが、型式学的に考えて1型式としている。F類とG類も型式学的に考えて編年している。さらに、G類を古墳時代後期として時期を決定している。

なお、淡路島の画期としてD類の時期（5世紀中頃から6世紀初め）とG類の時期（6世紀後半～7世紀前半）をとらえている。

故松下勝氏が昭和55年『兵庫考古』第9号で「北淡路の遺物」で今出川遺跡の製塩土器を紹介して、

「ほぼ完形に近い製塩土器である。二次焼成の痕跡は認められない。外面は幅の広い叩き目を持ち、内面の下半は器壁を薄くするために、削り取ったと思われるヘラ痕が認められる。台部外面はヘラによる押さえが認められる。」

この今出川遺跡の製塩土器は、淡路では、古いタイプに属するもので、松下氏の報告は貴重なものである。

浦上雅史氏が『但馬・丹波・淡路風土記』（昭和59年12月発行）で「古代の製塩」として淡路の製塩土器についてまとめている。

「土器製塩は19遺跡」として、「弥生後期は、洲本市名子の浜・石ヶ谷・宮崎遺跡。古墳時代前期には9遺跡。古墳時代後期になると淡路の土器製塩の最盛期として13遺跡があげられ、東浦の楠本塩入遺跡と西浦の浜田遺跡がある。」としている。

昭和61年2月1日、神戸文化ホールで行われた「埋蔵文化財研究集会」において、兵庫県教育委員会の故市橋重喜氏の発表「兵庫県下の海の生産用具－製塩土器を中心として－」という中で淡路の製塩土器を論じている。（『送遺－市橋重喜君追悼集』所収・平成3年発行）

市橋氏は、県教育委員会の発掘した淡路縦貫自動車道関係の遺跡である森遺跡や鉦田遺跡の成果を取り入れて発表している。また、兵庫県下全体の立場から淡路の製塩について位置づけている。

市橋氏は、生産遺跡にごく近い遺跡として雨流遺跡出土の製塩土器を古墳時代中期～後期（5世紀末～6世紀初め）の時期と紹介している。つぎに、森遺跡の古墳時代後期の住居址から出土した製塩土器のうち、備讃瀬戸に多い口縁部をつくり出すタイプと口縁部が内湾する鉢形で、粘土紐の継ぎ目が残されているタイプにわけて、後者は浜田遺跡と同じで、時期としては、前者よりもやや下るのではないかと考えている。さらに、鉦田遺跡で出土した製塩土器は、奈良時代の須恵器とともに出土しているので、隣の谷町筋遺跡の製塩土器とともに、分類している。以上、市橋氏は、弥生時代から古墳時代前期については、『山下町居屋敷遺跡発掘報告』の田村氏の分類をそのままのせているようで、発表でも、はっきりとは述べていない。また、浦上雅史氏は、『歴史と神戸』第26号（昭和62年発行）で「淡路島の海の生産用具－飯

蛸坪壺・製塩土器を中心に」で、最近の研究成果を発表している。また同氏は「海の生産用具」（追加版平成3年発行）で製塩土器の遺跡地名表をまとめている。最近、浦上氏は、脚台Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式と丸底Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式・Ⅳ式と編年されている。詳細については、同氏の今後の研究発表を待ちたい。

2. 分布調査の概要

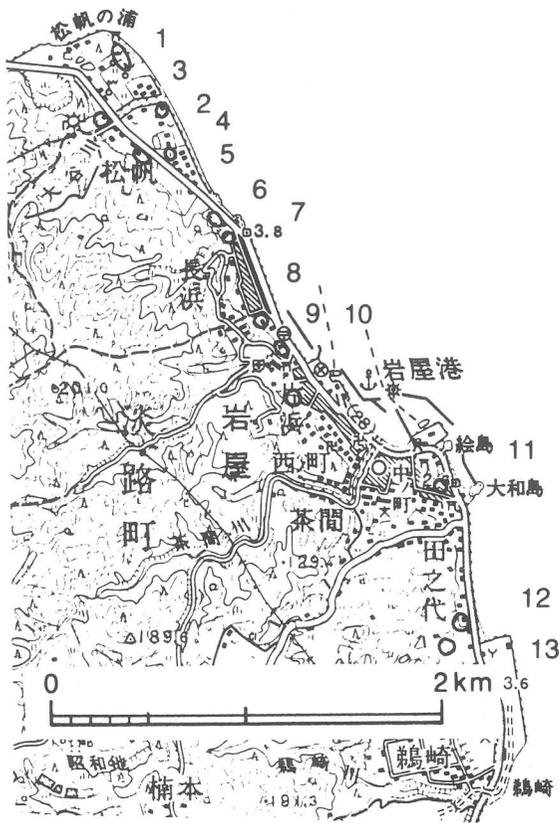
今回、淡路島の北半分すなわち津名郡の海岸線を踏査することによって、生産遺跡すなわち製塩遺跡・遺物の調査を開始することになった。関係する各町の教育委員会の社教の方や淡路の埋蔵文化財関係の方も含めて、淡路考古学研究会のメンバー数人によって、海岸線を踏査した。淡路島は、西浦海岸は海が迫ってきて、海岸が狭くなってきている。また東浦海岸は、埋め立てが多く、元の海岸線が少なくなってきている。しかし、できるだけ、丁寧に踏査して、宅地の中の畑も見てまわった。しかし、時間的制約や能力不足で十分な調査にはならなかったが、できるだけの努力はしたつもりである。なお、地名の中に塩焼や塩田・塩坪・塩尾などがみられる地に製塩土器が出土する箇所が発見されると、なんらかの関連性を考えさせられる。そして、予想した以上の成果が得られたことに、調査者として満足している。

① 淡路町

有名な小倉百人一首に藤原定家の歌「来ぬ人を松帆の浦の夕風に、焼くや藻汐の身もこがれつつ」とあり、『万葉集』には、「淡路島松帆の浦の朝風に玉藻刈りつつ夕風に藻汐焼き

第2表 淡路町の分布調査結果表

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	松帆遺跡	淡路町松帆	土師器・中世土器
2	中ノ嶋東遺跡	淡路町中ノ嶋	土師器・中世土器
3	大谷遺跡	淡路町大谷	中世土器
4	田ノ脇遺跡	淡路町田ノ脇	土師器・中世土器
5	松帆南遺跡	淡路町松帆	土師器・中世土器
6	龍松遺跡	淡路町龍松	土師器・中世土器
7	長浜遺跡	淡路町長浜	土師器・中世土器
8	西岡遺跡	淡路町西岡	土師器・中世土器
9	片谷遺跡	淡路町片谷	土師器・中世土器
10	片浜遺跡	淡路町片浜	土師器・中世土器
11	神ノ前遺跡	淡路町神ノ前	土師器・中世土器
12	ハセオリ遺跡	淡路町ハセオリ	土師器・中世土器
13	鶺鴒遺跡	淡路町鶺鴒	中世土器・サヌカイト



第5図 淡路町遺跡分布図

つつ」とある。淡路町岩屋の松帆の浦は、万葉時代、塩づくりが行われていた。しかし、現在はその松もないし、製塩遺跡も発見されていない。分布調査の結果は、一覧表のとおり、13箇所の遺物の散布状態がみられたが、残念ながら、製塩土器は発見できなかった。もっとも、松帆の浦といわれているところは、現在、会社の保養地として利用されていて、付近一帯は整地され、人工的な開発を受けているため元の海岸線はなくなってしまっている。

② 東浦町

東浦町は、北淡路の中で比較的平地部の多い地域である。フェリーの発着場の大磯港の建設に当たって埋め立てしたため、元の海岸線は現在の海岸線よりもかなり入りこんでいる。また、その南部の元浦港の場合も同じである。したがって、国道28号線のすぐ西に楠本塩入遺跡が位置し、国道のすぐ東に平松遺跡が位置することもでも証明できる。

東浦町の分布調査の結果は一覧表の通りであるが、27箇所の遺跡が確認された。なお製塩土器が散布していたのは、従来から知られていた楠本塩入遺跡・平松遺跡・今出川遺跡である。また釜口の船頭ケ内遺跡の平成元年の発掘調査の際、奈良時代の製塩土器片が散布していたことを確認している。

第3表 東浦町の分布調査結果表

番	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	南所遺跡	東浦町楠本浜添	弥生土器・土師器・サヌカイト
2	楠本塩入	東浦町楠本塩入	製塩土器
3	林ノ下遺跡	東浦町楠本林ノ下	土師器
4	井上遺跡	東浦町楠本西馬詰	土師器
5	猪ノ尻遺跡	東浦町浦猪ノ尻	土師器・中世土器
6	平松西遺跡	東浦町浦平松	土師器・中世土器
7	平松遺跡	東浦町浦平松	弥生土器・土師器・製塩土器
8	菅野遺跡	東浦町浦平松	土師器・中世土器
9	古茂尻遺跡	東浦町浦古茂尻	土師器・中世土器
10	塩浜遺跡	東浦町浦塩浜	土師器・須恵器・中世土器
11	宮ノ本遺跡	東浦町浦宮ノ本	土師器
12	砂田遺跡	東浦町浦砂田	土師器
13	内町遺跡	東浦町久留麻内町	土師器
14	久留麻大田遺跡	東浦町久留麻大田	土師器
15	一本松遺跡	東浦町久留麻一本松	土師器
16	今出川遺跡	東浦町久留麻一本松	土師器・須恵器・中世土器・製塩土器
17	神田遺跡	東浦町久留麻神田	土師器
18	並松遺跡	東浦町久留麻並松	土師器・中世土器
19	引野遺跡	東浦町久留麻引野	土師器・須恵器・中世土器
20	城原遺跡	東浦町久留麻城原	土師器・中世土器
21	津田遺跡	東浦町下田津田	土師器・中世土器
22	津田南遺跡	東浦町下田津田	弥生土器・土師器・中世土器
23	津田川遺跡	東浦町下田津田	土師器・中世土器
24	里遺跡	東浦町下田里	土師器・中世土器
25	釜口浜田遺跡	東浦町釜口浜田	土師器・中世土器
26	船頭ケ内遺跡	東浦町釜口船頭ケ内	縄文土器・土師器・サヌカイト・製塩土器
27	落合遺跡	東浦町釜口落合	縄文土器・土師器・サヌカイト・製塩土器



第6図 東浦町遺跡分布図

第4表 北淡町の分布調査結果表

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	小磯遺跡	北淡町野島江崎小磯	中世土器
2	中原遺跡	北淡町野島江崎中原	弥生土器
3	猪崎川遺跡	北淡町野島江崎浜田	中世土器
4	江崎岡畑遺跡	北淡町野島江崎岡畑	中世土器
5	梶取遺跡	北淡町野島江崎梶取	弥生土器
6	フケ遺跡	北淡町野島江崎フケ	中世土器
7	北畑遺跡	北淡町野島平林北畑	中世土器
8	向遺跡	北淡町野島平林向	中世土器
9	貴船神社前遺跡	北淡町野島平林才ノ神	弥生土器・製塩土器
10	才ノ神遺跡	北淡町野島平林才ノ神	中世土器
11	内開地遺跡	北淡町野島大川内開地	中世土器
12	清水遺跡	北淡町野島大川清水	中世土器
13	大持遺跡	北淡町野島大川大持	中世土器
14	中村遺跡	北淡町野島轟木中村	中世土器
15	助谷遺跡	北淡町野島藁浦	中世土器
16	大石遺跡	北淡町野島藁浦大石	中世土器
17	小代呂遺跡	北淡町野島藁浦	中世土器・製塩土器
18	大畑遺跡	北淡町野島藁浦	中世土器
19	宮ノ前遺跡	北淡町野島藁浦	中世土器
20	野嶋遺跡	北淡町野島藁浦	中世土器
21	富嶋A遺跡	北淡町富嶋	中世土器
22	富嶋B遺跡	北淡町富嶋	中世土器
23	富嶋岡畑遺跡	北淡町富嶋岡畑	中世土器
24	水越A遺跡	北淡町浅野南水越	中世土器
25	水越B遺跡	北淡町浅野南水越	中世土器
26	机ヶ脇遺跡	北淡町浅野神田	中世土器
27	貝殻遺跡	北淡町斗ノ内	中世土器
28	御明田遺跡	北淡町斗ノ内	中世土器
29	育波大谷A遺跡	北淡町育波	中世土器・製塩土器
30	育波大谷B遺跡	北淡町育波	中世土器
31	浜田北遺跡	北淡町育波	中世土器
32	小谷遺跡	北淡町育波	中世土器・製塩土器
33	浜田遺跡	北淡町育波浜田	中世土器・製塩土器
34	塩焼遺跡	北淡町育波塩焼	中世土器
35	室津南遺跡	北淡町室津	中世土器

③ 北淡町

北淡町では、今回の調査で、35遺跡を確認している。そのうち、製塩遺跡としては、従来知られていたのは、宅地造成の際、発見された浜田遺跡と埋葬の際発見された阿弥陀堂墓地の浜遺跡の2箇所であった。しかし、今回の生産遺跡の調査で、新しく4箇所の遺跡を加えることができた。ただし、浜田遺跡と浜遺跡と今回の調査で製塩土器の分布状態を拡大して、浜田遺跡としてまとめ、浜田遺跡と小代呂遺跡そして新しい3箇所を加えて、5箇所を確認した。今回の生産遺跡の調査で最も成果のあがったのは、北淡町である。なお、新しく確認された遺跡は次のとおりである。分布調査によって得られた製塩土器は破片であるので、十分な器形は明確ではないが、一応、浜田遺跡と同じ丸底形のものである。



第8図 一宮町遺跡分布図

1 貴船神社前遺跡 北淡町野島

分布調査中に、電信柱の立替えに行き合わした。したがって、写真のように、深く掘った土層が確認でき、製塩土器の包含層が発見された。新発見である。

2 育波大谷 A 遺跡 北淡町育波大谷

この遺跡も新発見の遺跡である。分布調査の結果、製塩土器片が20片も確認された。おそらく、この付近に製塩遺跡が存在すると思われる。

3 小谷遺跡 北淡町育波

浜田遺跡の北側で製塩土器が確認された。大きな範囲でいえば、浜田遺跡の中に含まれるかもしれない。また、浜田遺跡の南部に位置する塩焼遺跡も、今回の調査では製塩土器が発見できなかったが、地名からいうと、この浜田遺跡を中心にして、塩をつくる地帯であったと考えられる。

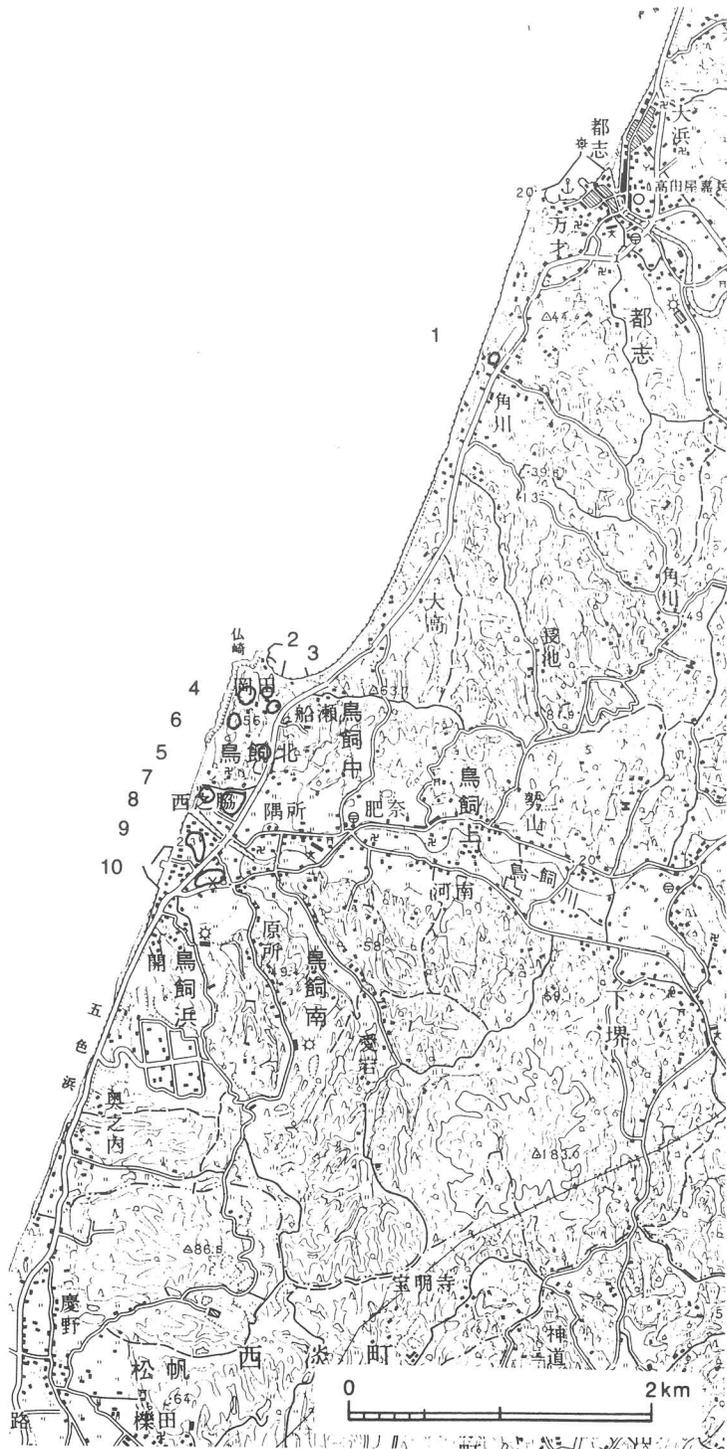
④ 一宮町

一宮町の分布調査の結果は15箇所である。製塩土器の散布はみられなかった。

土器の分布は、尾崎に片寄っていて、郡家付近は、海岸線の開発が進んでいて、遺跡は破壊されてしまっている可能性がある。江井にも4箇所の散布地がみられたが、江井より南部は、海岸線に崖面が迫っていてほとんど分布の可能性はなかった。

第5表 一宮町の分布調査結果表

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	小丸遺跡	一宮町尾崎小丸	土師器
2	社領遺跡	一宮町尾崎社領	土師器
3	大濱遺跡	一宮町尾崎大濱	土師器・中世土器
4	社領濱	一宮町尾崎社領濱	土師器・土錘
5	羽坂遺跡	一宮町尾崎羽坂	須恵器・中師器
6	大神子遺跡	一宮町尾崎大神子	土師器
7	尾崎浜遺跡	一宮町尾崎浜	土師器
8	川底遺跡	一宮町尾崎川底	土師器
9	仮間谷遺跡	一宮町尾崎仮間谷	土師器
10	三反切遺跡	一宮町江井三反切	土師器
11	石ノ前 A 遺跡	一宮町江井石ノ前	土師器
12	石ノ前 B 遺跡	一宮町江井石ノ前	サヌカイト
13	平見山 A 遺跡	一宮町江井平見山	土師器
14	平見山 B 遺跡	一宮町江井平見山	土師器
15	風呂ノ前遺跡	一宮町草香北風呂ノ前	土師器
16	川端遺跡	一宮町深草川端	土師器・中世土器



第9図 五色町遺跡分布図

⑤ 五色町

五色町では、海岸線のある都志と鳥飼の2箇所である。分布調査の結果は計10箇所であったが、製塩土器の散布はみられなかった。鳥飼の海岸線で、土器片の包含層が発見できたが、近代の蛸壺の破片の包含層であることが確認された。

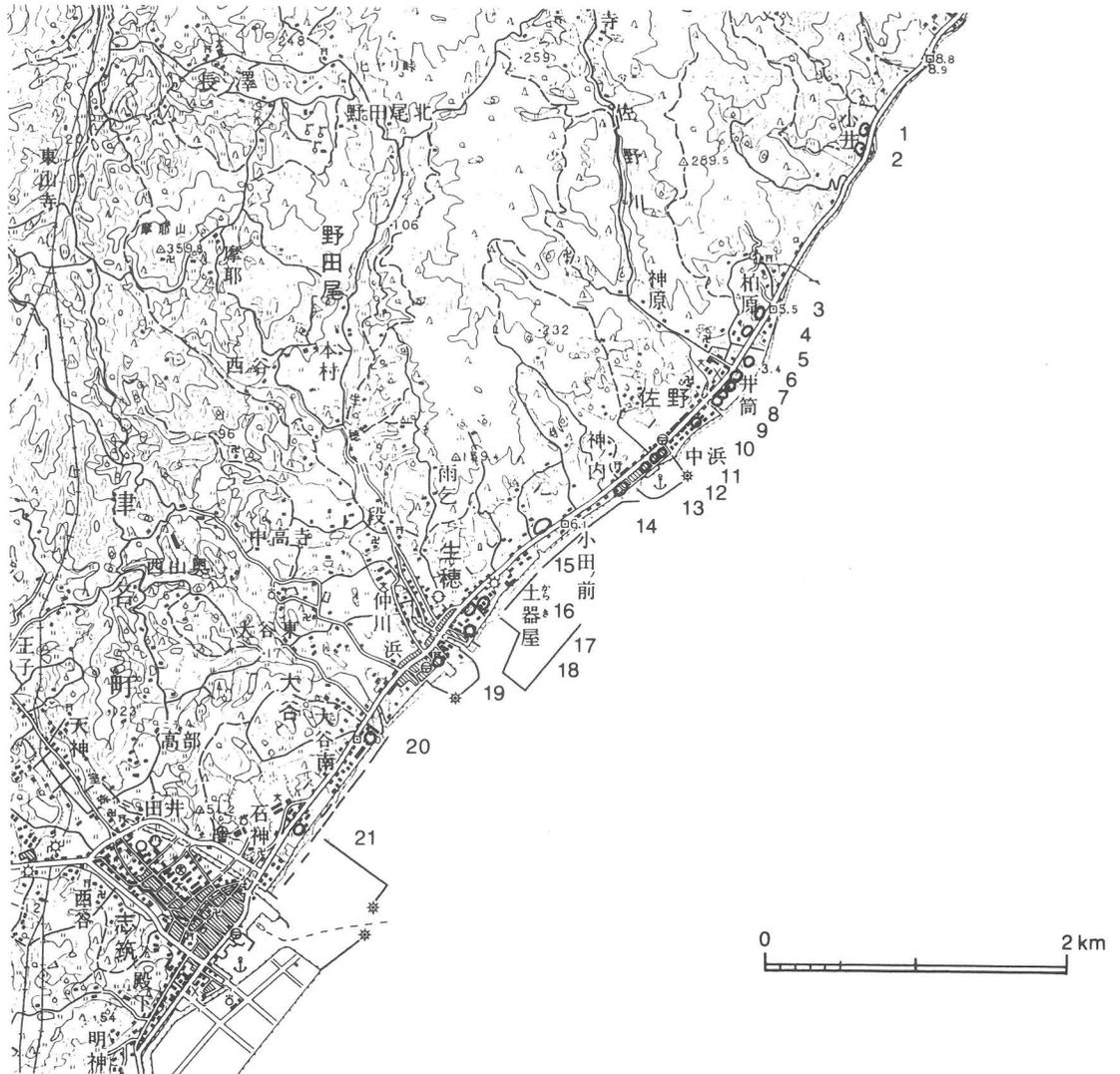
第6表 五色町の分布調査結果表

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	角川上ナダ遺跡	五色町都志角川	土師器
2	藤谷A遺跡	五色町鳥飼浦藤谷	須恵器
3	藤谷B遺跡	五色町鳥飼浦藤谷	土師器・中世土器
4	岡田遺跡	五色町鳥飼浦岡田	中世土器
5	中瀬遺跡	五色町鳥飼浦岡田中瀬	土師器・中世土器
6	岡田居屋敷遺跡	五色町鳥飼浦岡田居屋敷	土師器・中世土器
7	西之脇遺跡	五色町鳥飼浦西之脇	須恵器・中世土器
8	モウゼン遺跡	五色町鳥飼浦西之脇	中世土器
9	二重遺跡	五色町鳥飼浦二重	土師器・中世土器
10	ハリノキウ遺跡	五色町鳥飼浦二重	土師器・須恵器・中世土器

⑥ 津名町

津名町では、 箇所の遺跡が確認された。しかし、製塩土器の散布はなかった。津名町は、志筑のフェリー乗り場や高速艇あるいは荷物船の発着場やオノコロアイランドなどの開発によって、埋め立てが他の町の比して進んでいるところである。

しかし、佐野・生穂・大谷などでは、宅地の間にある小さな畑地があって、分布調査可能であった。しかし、志筑や塩尾になると分布調査可能な箇所は少ない。



第10図 津名町遺跡分布図

第7表 津名町の分布調査結果表

番	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	野手遺跡	津名町佐野小井	土師器
2	向原遺跡	津名町佐野小井	土師器
3	音田A遺跡	津名町佐野柏原	縄文土器・弥生土器
4	塚の鼻遺跡	津名町佐野柏原	中世土器
5	檜原遺跡	津名町佐野柏原	土師器・中世土器
6	音田B遺跡	津名町佐野柏原	土師器・中世土器
7	佐野原遺跡	津名町佐野井筒	土師器・中世土器
8	高城A遺跡	津名町佐野井筒	土師器・須恵器・中世土器
9	高城B遺跡	津名町佐野井筒	土師器・中世土器
10	横田遺跡	津名町佐野北浜	土師器・中世土器・瓦器
11	草田遺跡	津名町佐野中浜	土師器・須恵器・中世土器
12	橘遺跡	津名町佐野中浜	土師器・中世土器
13	南浜遺跡	津名町佐野南浜	土師器
14	小田ノ前遺跡	津名町佐野小田ノ前	土師器・中世土器
15	西ノ沢遺跡	津名町佐野小田ノ前	土師器・中世土器
16	犬ノ馬場A遺跡	津名町生穂土器屋	土師器・須恵器・中世土器
17	犬ノ馬場B遺跡	津名町生穂土器屋	土師器・中世土器
18	川尻遺跡	津名町生穂札場	土師器・中世土器・製塩土器
19	生穂浜遺跡	津名町生穂浜	土師器・中世土器
20	大谷濱遺跡	津名町大谷濱	弥生土器・須恵器・製塩土器
21	志筑傍示遺跡	津名町志筑傍示	瓦器

3. 製塩遺跡

淡路島の製塩遺跡は、研究小史にも述べたとおり、弥生時代後期から奈良時代までの時期と考えられている。弥生時代中期まで遡るかどうかなについては、まだ検討の余地がある。現在までのところ、考古学的な発掘調査が行われたところは、次の遺跡のみである。

旧城内遺跡

山下町居屋敷遺跡

楠本塩入遺跡

浜田遺跡

他の遺跡については、ほとんどが、表面採集が温室の建設中や宅地造成などで偶然発見されたものである。それでも、現在のところまで得られたデータで岡本稔・浦上雅史両氏によって編年作業が進められている。

浦上雅史の編年は、次の通りである。

- ・脚台付Ⅰ式 -脚台部が下方に大きく広がる。胴部不明（伊毘）
- ・脚台付Ⅰ亜式 -脚部が内湾がみで脚台部と胴部との間に短い柱状部を有する（旧城内）

- ・脚台付Ⅱ式 -脚台部の下方への広がり短くなり、胴部は細長いシリンダー形を呈する。胴部外面には叩き目を有する。(ⅡAには今出川・宮崎、ⅡBには旧城内)
 - ・脚台付Ⅲ式 -Ⅱ式より脚台部が小型化し、胴部が外ふくらみ、胴部外面に叩き目・ハケメ・ケズリ・ナデ調整あり。(高崎・山下町居屋敷)
 - ・丸底Ⅰ式 -器壁の厚さが1ミリほどの薄い堅い小形で、細長い胴部に素薄鞠ぎみの直線的な口縁をもつ。(名子の浜・高崎・井上)
 - ・丸底Ⅱ式 -丸底椀形で、胴部から口縁部にかけて内湾する、口径は10センチほど(山下町居屋敷遺跡・沼島)
 - ・丸底Ⅲ式 -丸底Ⅱ式が大形化したもの。口径が15センチほど、器壁も厚くなる(浜田・楠本塩入)
 - ・丸底Ⅳ式 -口縁は直立、器壁の厚さが1センチほどの厚さになる。厚手粗製土器(谷町筋)
- なお、浦上氏は、脚台Ⅰ式は弥生時代期から庄内式期、Ⅱ式は庄内期を中心にその前後、Ⅲ式は布留併行期を中心にその前後、丸底Ⅰ式は5世紀代、Ⅱ式は6世紀代、Ⅲ式は7世紀代、Ⅳ式は8世紀以降と考えている。

現在のところ、この浦上氏の編年が淡路でもっとも進んだもので、今後、さらに新しいデータ次第で変化してくることであろう。

さらに、淡路縦貫自動車道の発掘調査の成果や舟木遺跡の発掘成果によってますますデータが増加して、淡路の製塩遺跡の研究が進みつつある。特に、製塩のための生産遺跡からの遺物のみでなく、海岸から遠く離れた距離にある内陸部にも製塩土器の出土がみられるようになった。谷町筋遺跡・雨流遺跡・森遺跡そして舟木遺跡がある。もっとも淡路島の場合、内陸部といっても、全島すべて海岸地帯と同じ位置にあると考えてもよいと思う。従来から、淡路の製塩遺跡は洲本市の海岸で集中的に知られていたにすぎない。そして、北淡路では、東浦海岸では、楠本塩入遺跡、西浦海岸では浜田遺跡。南淡路では、沼島のみである。西浦南部の海岸地帯や南部の灘方面からは製塩土器は出土していない。

また、製塩遺跡の知られている箇所は、近くに川があること、燃料があることなどである。

平城京から出土した木簡に阿万や物部から塩が庸や調として納められた記録がある。ところが、製塩土器の出土はない。

Ⅳ. 調査結果

1. 浜田遺跡

①はじめに

浜田遺跡は北淡町に所在する淡路を代表する製塩遺跡であるが、その内容や遺跡の範囲などについては明らかにはなっていない。個人住宅建設時に多量の製塩土器を包含する層が確認されているが、周辺部も徐々に開発が計画されていることから、製塩遺跡の内容を把握するためにも、早急な範囲確認調査が必要と思われた。

遺跡は、津名郡北淡町育波字浜田300に所在する。現在の海岸線から約250m南側に位置している。本来の海岸線に面していた可能性が高いと思われる。

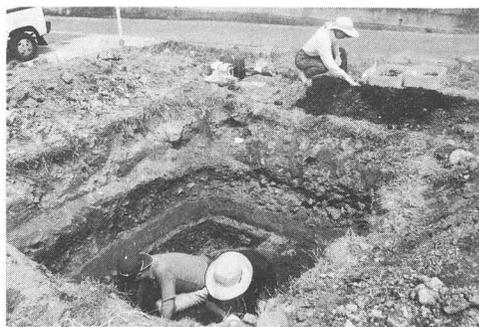
そのことから、土地所有者である浜西和昭氏の快諾を得て、確認調査を実施することとなった。調査は、担当者の日程の都合から夏期休暇に実施することとなり、7月26日から4日間行った。調査にあたっては、浜西氏をはじめ地元の方々の協力を得た。また、北淡町教育委員会には発掘器材の貸与など全面的な協力を得た。

〔調査担当〕	淡路考古学研究会	波毛康宏 永田誠吾 和田知子
	津名郡町村会 兵庫県教育委員会	伊藤宏幸 渡辺昇

②調査の結果

3箇所の確認調査を実施した。東から1・2・3グリッドと呼称するが、3グリッドではほとんど包含層がなくなっており、遺跡の西端かと思われる。

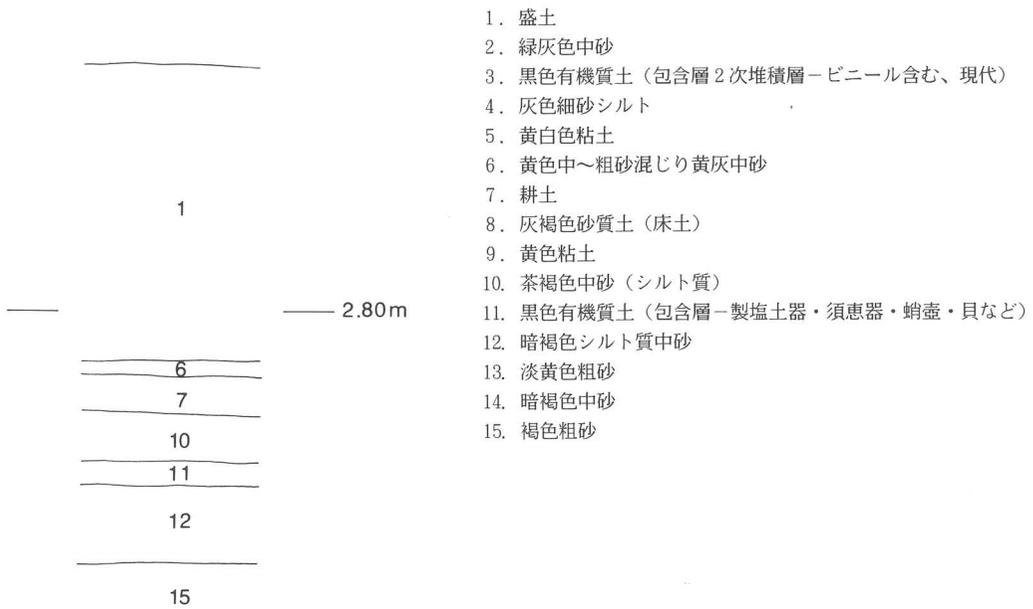
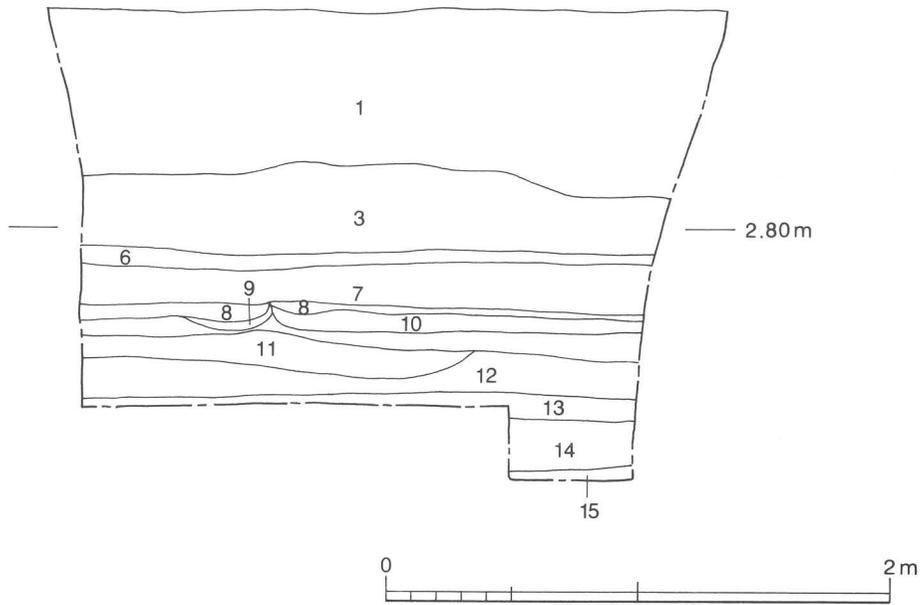
調査対象地は、現在県道福良江井岩屋線の北側に面している。本来は育波の町中を通っていたが、昭和30年代後半に現在の県道をバイパスとして建設したもので、その際に一筆の水田が南北に分かれたものである。その後、現状のように盛土されたようである。確認調査の結果から、約1m盛土されている。その中に瓦・礫などとともに製塩土器も多量に含まれている。盛土の下に旧耕地が存在している。第2グリッドでは小畦畔も確認されている。耕地直上から瓦やビニールなどが確認されていることから、現代の水田面である。盛土内の2次堆積層は、一見すると誤認するほど堆積しており、ごく近い場所から削られて埋められたものと思われる。



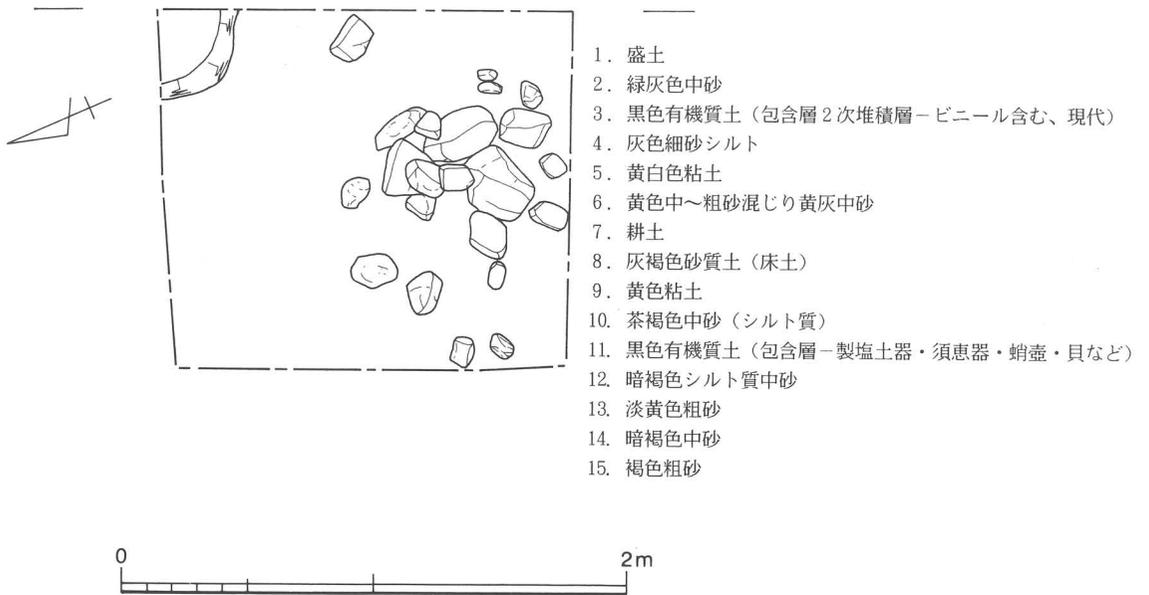
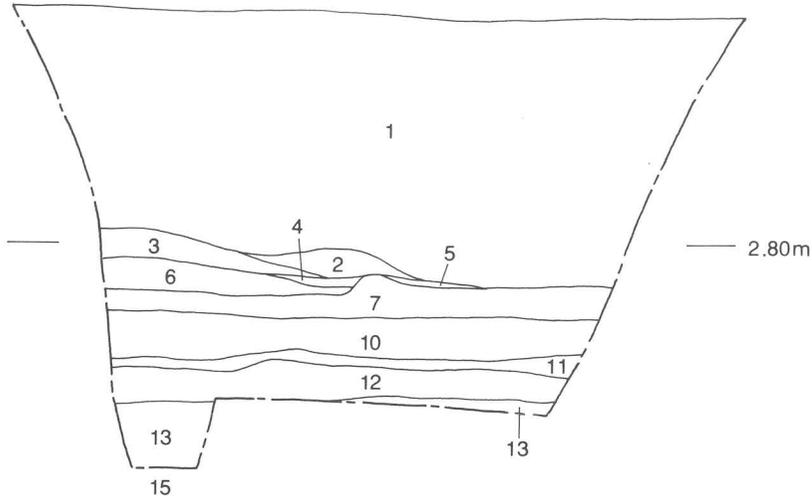
第11図 調査風景



第12図 浜田遺跡の位置と確認調査地点



第13図 土層断面図



第14図 2 G 平面図・土層図

耕土の下に床土・茶褐色シルト質中砂層があり、その下に製塩土器などの純然たる包含層が存在する。その下に40～50cmの製塩土器を含む層がある。大別して4層に分けられ、一時期でなく、相当期間継続して生産を行っていたものと思われる。包含層は東側の第1グリッドが厚く、西にいくほど薄くなり、第3グリッドではほとんど遺物は含まない。包含層には製塩土器以外に須恵器・イイタコ壺のほかに貝・獣骨など自然遺物も第2グリッドを中心に出土している。須恵器から7世紀前半であることが明らかである。

遺構は包含層下の面（12層上面）と地山面（15層上面）の2面が考えられる。さらにその間にも遺構が存在する可能性がある。確認調査内では、第2グリッドで石組みの遺構があるが、製塩に直接結び付く遺構ではないようである。貝・獣骨など自然遺物が多量に伴うことが遺構の性格を表しているのではないかと推定される。

今回の確認調査では検出されなかったものの、第1グリッドの上下2面とも製塩に伴う遺構に極めて近い位置を占めるものと思われる。近接地に遺構が存在する可能性は非常に高いものと思われる。製塩方法などを究明するためにも、継続する調査が望まれる。

今回の確認調査に先立って北側で確認調査が行われたが、遺跡は広がっていなかった。海岸部の生産遺跡であることから、隣接地でも地形が変わっていることが想定される。引き続き南側・東側の遺跡の範囲も早急に把握する必要があるものと思われる。

③出土遺物

製塩土器の純粋な包含層が存在したことから、多量の製塩土器が出土している。ただ、1時期のものに限られている。2次堆積も含めてコンテナ10箱以上出土している。製塩土器が大半であるが、須恵器・タコ壺も出土している。土器以外では貝が遺跡としては珍しく多く出土していることが特徴である。

製塩土器は、大きくは1タイプであるが、細かくみると分類が可能である。手捏ねで仕上げていることは共通している。粘土紐も継ぎ目なども明瞭に看取できる。口縁端部のみ僅かにヨコナデで仕上げているものもあるが、大半はナデ仕上げのものが多い。一部ハケ整形を行っているものもある。口縁部のタイプは直立するものと、内傾するもの、内湾するものがある。ほとんどが内湾するタイプである。細かなプロポーシヨンの変化はあるが、手捏ねによる成形のためと思われる。口縁端部も丸くおさめるものと、尖りぎみのもの、やや角張るものがあるが、個体差と考えられる。

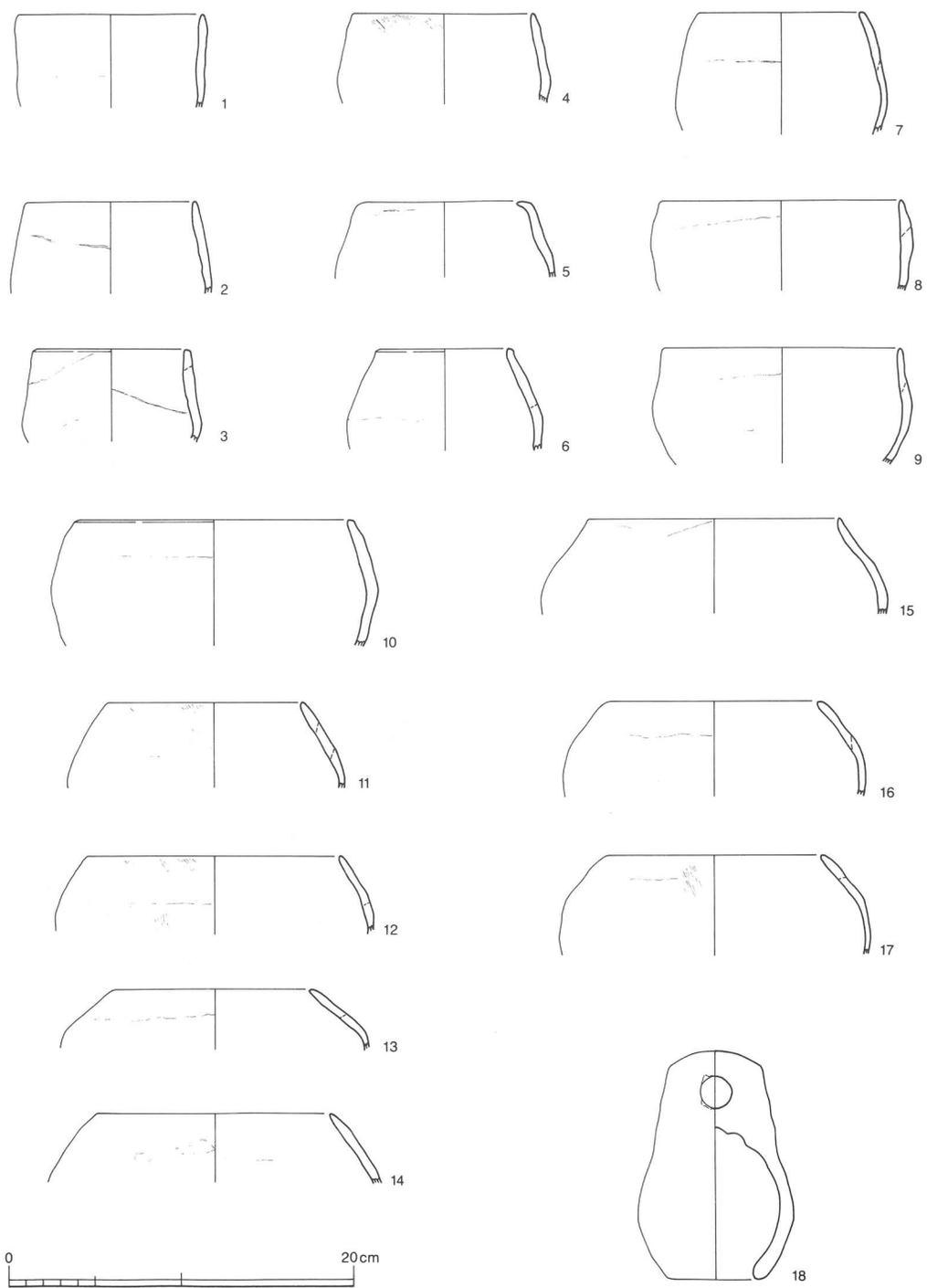
完形品が1点もないことから、正確な法量はわからないが、口径8～16cmと数値の開きがあり、大型品で器高は15cm前後になるものと思われる。

貝類もコンテナ2箱を数える。貝の鑑定は安藤保二氏にお願いした。以下の結果・所見も氏の教示によるものである。

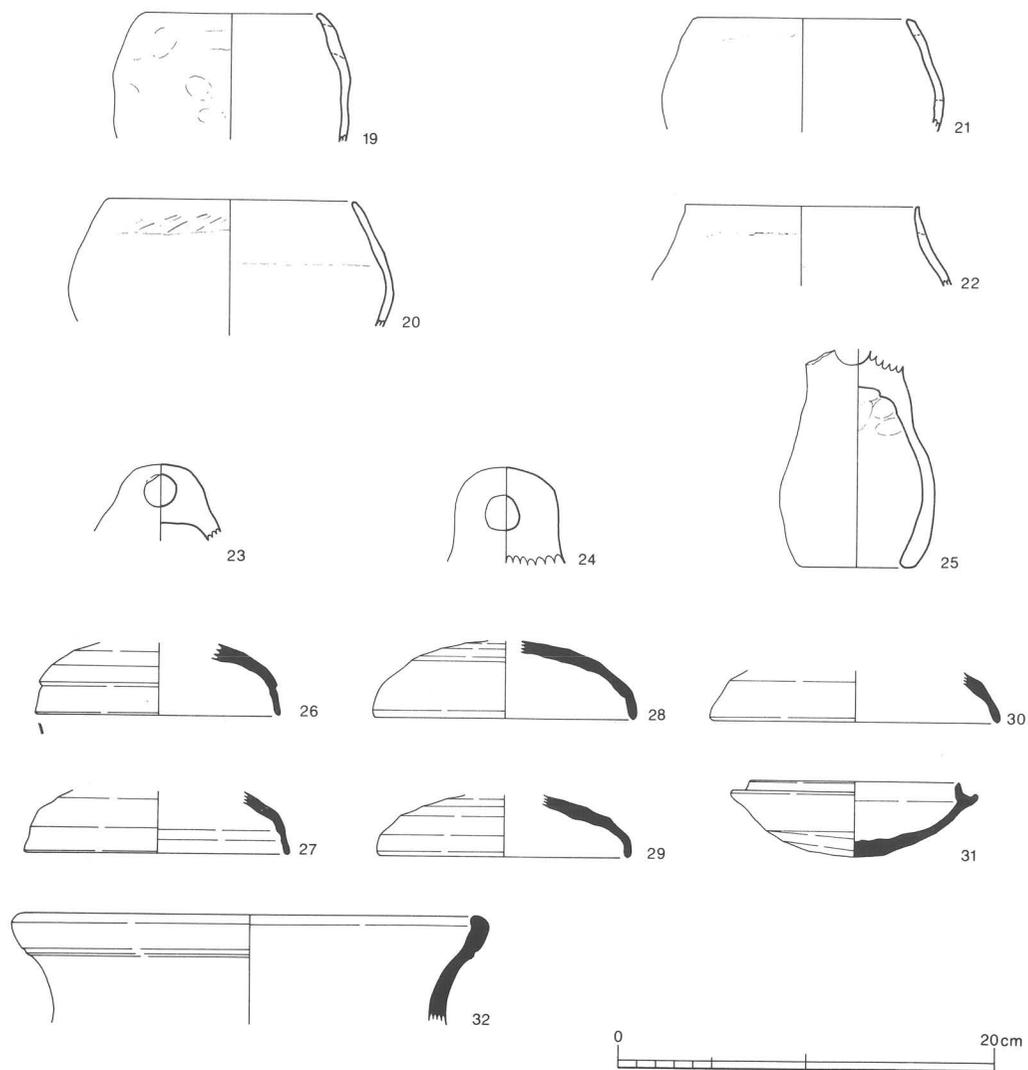
確認した貝類は10種類である。

1. コシダカガンガラ *Omphalius rusticum* にしきうず科
2. サザエ *Turbo cornutus* SDLANDER りゅうてん科
3. ツメタガイ たまがい科
4. シドロ すいしょうがい科
5. アカニシ あっきがい科
6. タマキガイ あおしらすがい科
7. イガイ いがい科
8. チリボタン うみぎく科
9. イタボガキ いたぼがき科
10. バカガイ ばかがい科

10種類のうち量的には、バカガイが最も多くコシダカガンガラがそれに次いでいる。バカガイが全体の半数以上を占めている。全種類とも食用で遺跡周辺の海浜で採れるものである。砂浜で採取されるものは、ツメタガイ・タマキガイ・バカガイで、磯の石に付着するものはコシダカガンガラがある。これらは海辺からも採取可能な貝類である。サザエ・イガイは岩礁部のやや沖合いに生息しているものである。浜田遺跡出土のサザエは外側の棘が短いことから内海産のものと思われる。シドロ・チリボタン・イタバカキは深さ10m前後の近海に生



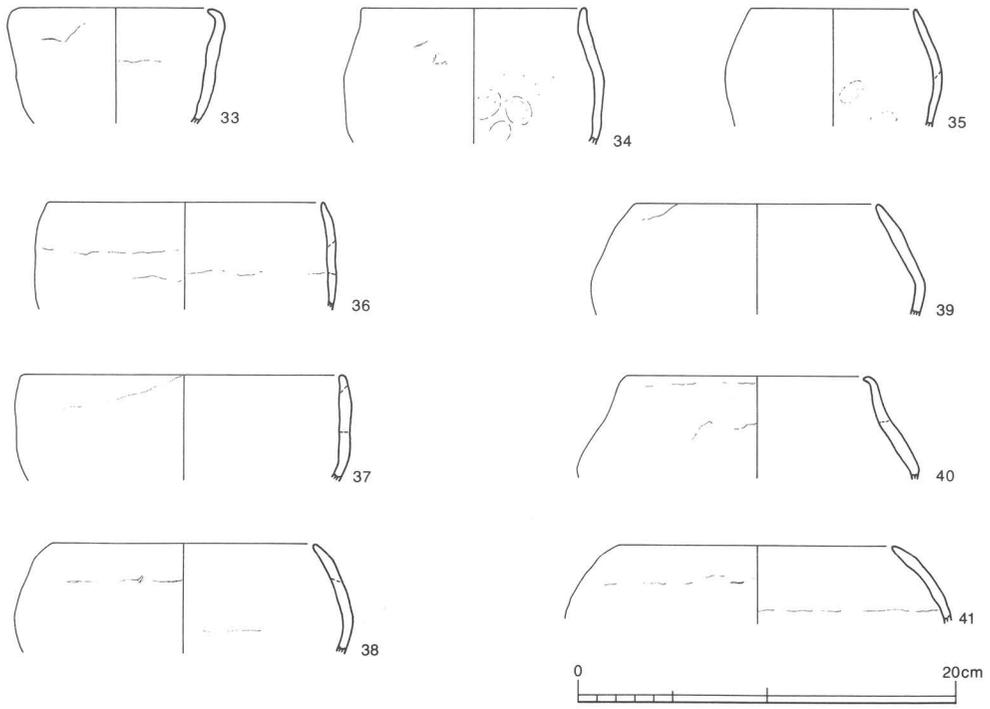
第15図 浜田遺跡、土層実測図(1)



第16図 浜田遺跡、土器実測図(2)

息している。すべて食用であるが、美味なのはシドロ・イガイ・チリボタン・イタバカキである。なかでもイガイは美味で高級品と言われている。

獣骨も数点認められるが、明らかでない。



第17図 浜田遺跡、土器実測図(3)

は、久野々遺跡、おぎわら遺跡、上ノ開地遺跡をはじめとした弥生時代後期の遺跡が数多く密集するという、北淡路の同時期における特異な状況をつくりだしている。

その舟木遺跡周辺において県営ほ場整備事業が計画されたのを契機として、平成2年度から発掘調査が実施されており、その実態の一部が明らかになりつつある。

平成2年度に実施した第1次調査（確認調査）では、E-2グリッドで竪穴住居址を検出したのはじめ、数多くの調査グリッドで遺構や遺物包含層を検出した。その結果、本遺跡の時期は弥生時代後期を中心に一部は庄内式併行期にまで及ぶことが明らかとなった。さらに、その範囲もほ場整備区域よりも広大なものであり、南北800m、東西500mにも及ぶ広大なものであることが明らかとなった。

この結果を受けて、平成3年度1700㎡、平成4年度870㎡の全面調査を実施し、直径10.7mを測る大型の円形竪穴住居址、環濠状の大溝等を検出するなど多大の成果をあげ、現在も調査継続中である。

今回は、本報告書の内容に沿う意味で、第1次調査E-2グリッドで検出した竪穴住居址とその内部から出土した56個体を数える製塩土器について報告する。

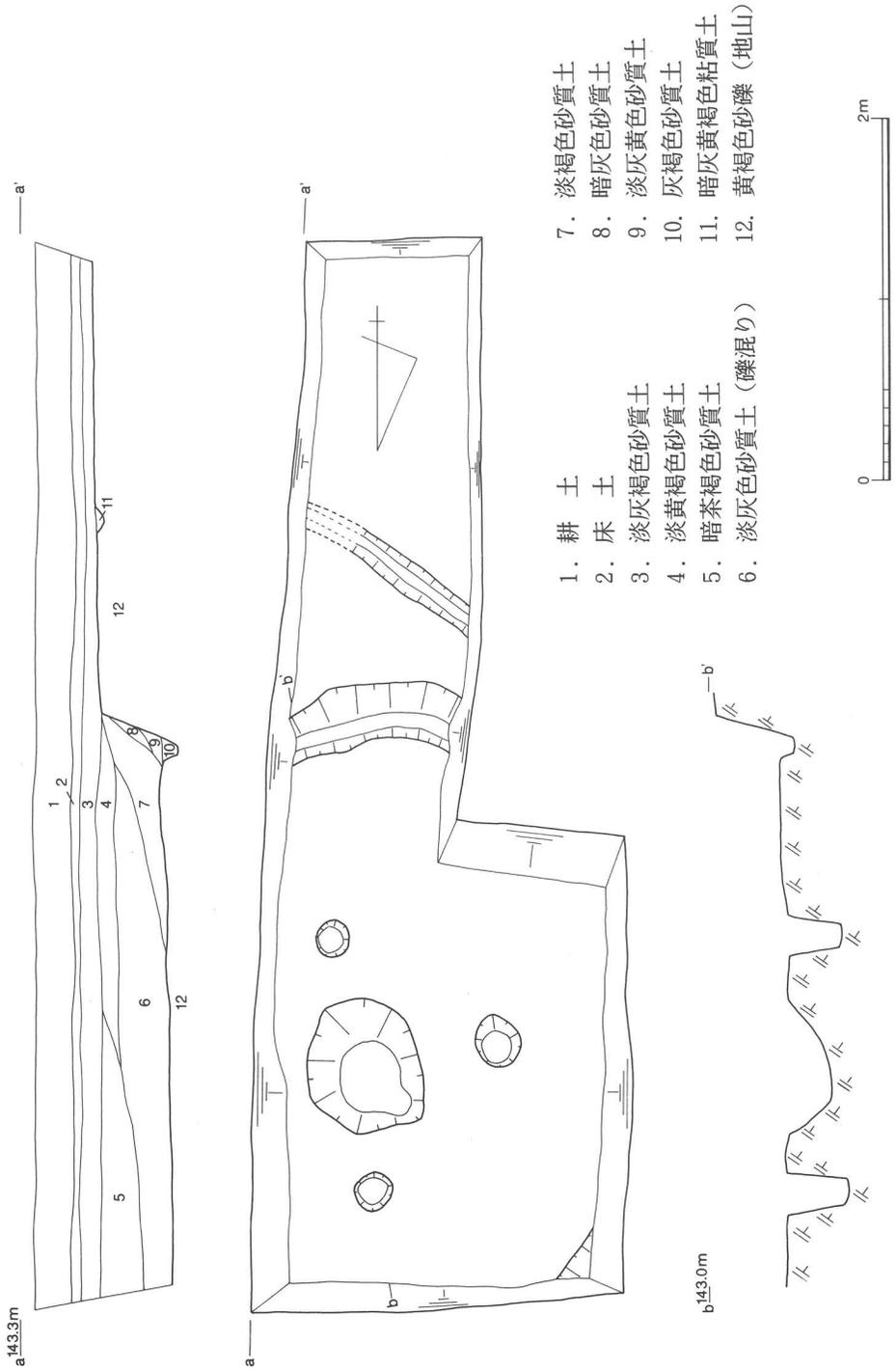
7. 調査の概要

調査は、ほ場整備区域のほぼ全域を対象に58箇所のグリッドを設定して実施し、約半数に相当する27箇所で見つかった遺物包含層や遺構を検出した。そのほとんどが弥生時代後期のものであった。このうち製塩土器はE-2グリッドの竪穴住居址とD-2グリッドの遺物包含層から出土したが、D-2グリッドからは1点のみの出土であり、そのほとんどはE-2グリッドから出土している。

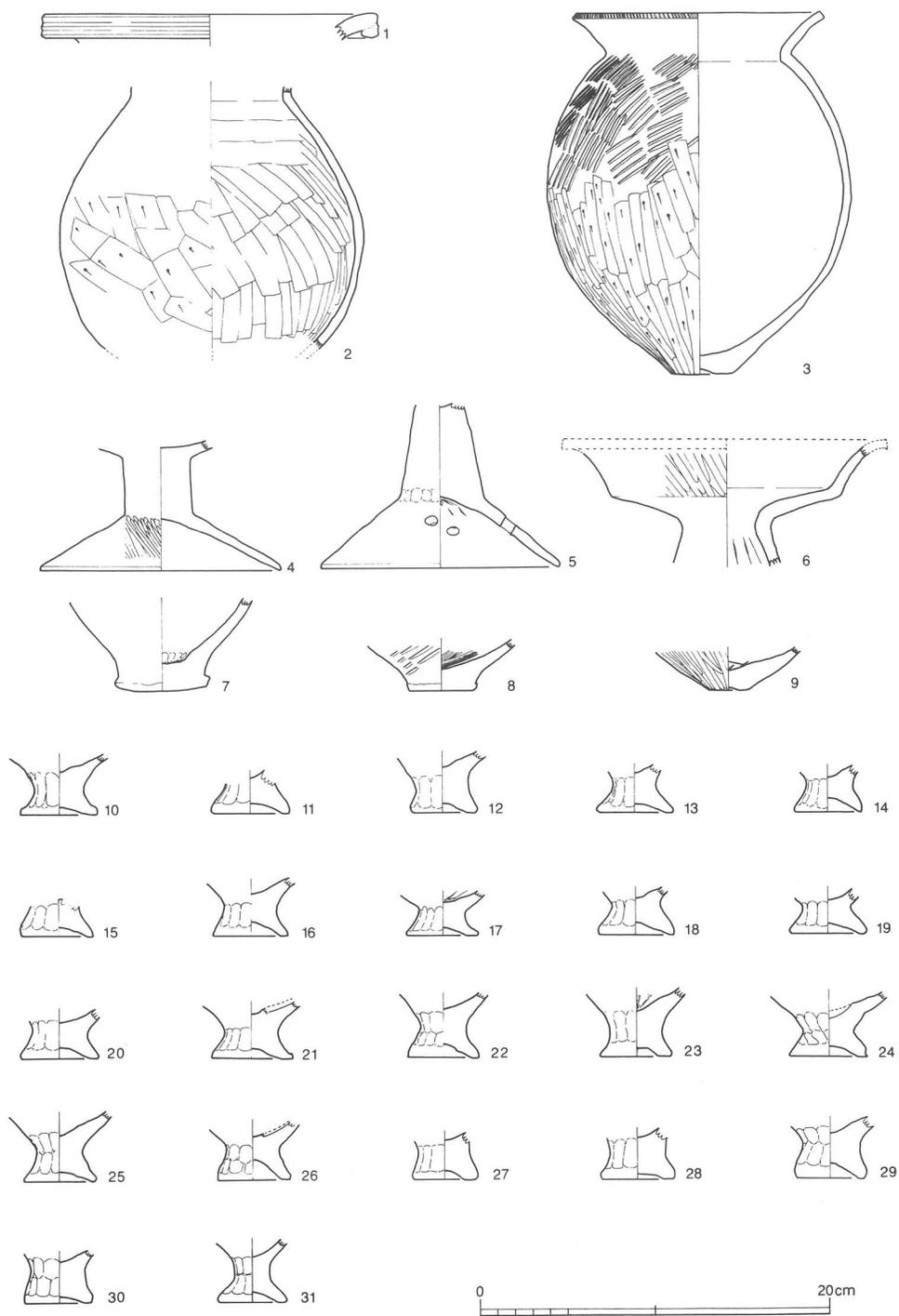
E-2グリッドは、棚原大池を中心に周囲を尾根で囲まれた小盆地の西尾根東向き斜面裾にあり、その尾根から派生する東西を浅い谷状の地形で隔てられた幅約30mの張り出し部分に位置している。設定地点の標高は143mを測る。南真上の尾根上、標高170mの地点には巨石信仰で知られる石上神社が鎮座し、舟木遺跡の各所から見渡すことができる。E-2グリッドは当初2×2mの規模で調査を行う予定であったが、遺物を含む土層を掘削した時点で3ヶ所の柱穴とそれに囲まれる形で土壌1基を検出したため、これが竪穴住居址に伴うものであることが予想された。そこで、これらのことを確認するために南方向に幅1mのトレンチを拡張した結果、当初のグリッドは竪穴住居址のほぼ中央部に設計されていたこと、さらに遺物を含んだ土層は住居址の埋土であることが明らかとなった。

(1)遺構

E-2グリッドで検出した住居址は、その全容は明らかではないが、1辺約3m前後の方形もしくは隅丸方形の竪穴住居址と予想される。住居址の遺存状況は良好で、南側拡張トレンチでは高さ約35cmの壁の遺存することが確認された。壁下には幅約15～20cm、深さ約10cmの



第19図 舟木遺跡 竪穴住居跡



第20図 舟木遺跡 土器実測図

壁溝が巡らされている。床面中央部には土壙が設けられ、それを取り巻くように3本の柱穴が検出されたが、本来4本柱になるものと考えられる。

中央土壙は長径約75cm、短径約60cm、深さ約30cmの楕円形を呈し、土壙では薄い炭化物層の堆積を確認している。柱穴は、いずれも径約20～25cmの比較的細いものであり、深さは約30～35cmを測る。これらの柱穴は中央土壙を取り巻くように、それぞれ約110cmの等間隔で配されている。床面は極わずかに北へ傾斜しているが、ほとんどフラットである。

遺物は、床面から遊離したものがほとんどであり、第5層及び第6層から出土した。また、中央土壙からも製塩土器2個体をはじめとして数点の土器が出土しているが、これも土壙内に堆積した第6層から出土している。したがって、これらに遺物は住居址が廃棄された後に流入したものである可能性が高い。

(2)遺物

住居址から出土した遺物には、製塩土器のほかに壺、甕、高杯、器台などがある。いずれも細片化した状態で出土しており、完形のものはない。特に、製塩土器は全て脚台部のみであり、原型に復し得るものも皆無であった。

(1)は、広口壺の口縁部と考えられる。口縁端部が垂下するもので、端面には極浅い2条の凹線文が施される。(2)も壺とみられるが、口縁部と底部を欠く。外面の底部から胴部中位くらいまで表面を掻き取るような鋭い篋削りの痕跡が観察され、器表面の凹凸が激しい。内面も粘土を掻き取るような刷毛目調整が施されている。

甕(3)は、唯一原型に復し得るものである。胴部から屈曲してほぼ直線的に開く口縁部で、端部には刻みを入れる。胴部中位に最大径を持つ球形に近い体部で、低部はドーナツ状上げ底を呈する。体部外面上半には右上がりの叩きが残し、下半部は器表面を掻き取るように施された篋削りが観察される。内面は全面なでによる調整が施されている。

高杯は、いずれも杯部を欠き全体像は不明である。(4)は、円筒形の短い柱状部から屈曲し、直線的に大きく開く偏平な脚部である。(5)は、上方がややすぼまる柱状部から屈曲してやや内湾ぎみに開く脚部で、裾部に4箇所の円形の穿孔が施される。いずれも、柱状部は中実化している。

器台(6)は、直線的に開く円錐状の脚部からほぼ水平に開き、さらに屈曲して外反気味に立上がる受部をもつもので、淡路型器台と呼ばれているもののひとつとみられる。外面には篋磨きが施される。

底部(7)(8)は突出する平底で、(9)の外面には叩きが施される。(7)は外面の摩滅が著しく観察困難であるが、刷毛による調整の可能性が高い。(9)も底部であるが、ドーナツ状の形態を呈し、外面には篋磨きが施される。

製塩土器は総数56個体が出土した。(10)は第5層：暗茶褐色砂質土層から出土し、(26、30)

は中央土壙から出土したものであり、それ以外はすべて第6層：淡灰色砂質土層から出土したものである。

製塩土器56個体のすべてが脚台を持つタイプのものである。胴部と脚部の境目に指頭圧痕を残すものが大半であり、胴部の破片に叩きを残すものもある。脚部から胴部へはゆるやかに斜め上方に大きく開きながら移行する。脚台の径はいずれも4cm前後を測り、それを大きく逸脱するものは見られない。脚部が外方向へ開くタイプ(10~26)のものと、開きが弱く中実の短い円筒状の形態を呈するタイプ(27~30)のものがある。(31)は、やや長めの柱状部をもち、そこから斜め上方に開くタイプで、他のものと若干様相を異にする。これらの製塩土器はすべて二次焼成を受け器壁の剝落も著しく、色調は赤褐色を呈する。

8. 小結

本調査は、ほ場整備事業に伴う確認調査ということで、調査に様々な制約があり十分な調査を実施し得たとはいいがたい面がある。しかしながら、海岸線から遠く離れた山間地の集落で大量の製塩土器が出土した意義は大きく、生産地と消費地との間の塩の流通を考える上で貴重な資料であるといえる。

また、時期についてであるが、甕(3)は、口縁部の成形技法など伝統的な第五様式の手法が残るものの、最大径が胴部中位にあり球形化した体部を呈するなど新しい段階の様相が看取される。さらに、胴部外面下半を篋削りする手法は北淡路における第五様式に一般的に見られる手法ではなく、器壁を薄く仕上げることを目的とした次段階の新しい手法といえるものかも知れない。また、器台(6)は淡路地域独特の形態を呈する、いわゆる淡路型器台⁽¹⁾として認識されているもののひとつである。この器台は現在のところ、洲本市の下内膳遺跡⁽²⁾、東浦町の今出川遺跡⁽³⁾などでの出土が知られている。今出川遺跡については採集資料であるが、下内膳遺跡では庄内式併行期の遺物と供伴する⁽⁴⁾事が知られており、この器台も同時期のものであると考えられる。

これらのことから、今回E-2グリッドの竪穴住居址から出土した一群の土器は、庄内式に併行する時期のものと考えられる。土器の出土状況から、竪穴住居址が廃棄された後に堆積した遺物である可能性は強いが、住居址が廃絶してから埋没するまでのタイムラグはそんなに長いものとは考えられないため、住居址の時期についてもほぼ庄内式に併行する時期のものであると考えられる。

製塩土器については、同じタイプのものが北淡町の小代呂遺跡、津名町の神原遺跡(円城寺遺跡)、洲本市の旧城内遺跡、山下町居屋敷遺跡、高崎遺跡などで出土している。⁽⁵⁾これらの遺跡から出土した製塩土器に伴出遺物などから、布留式期を中心とした古墳時代初頭から前半期の時期が与えられている。⁽⁶⁾ 島外に類例を求めると、対岸の播磨・長越遺跡において同じタイプの製塩土器が約60個体出土しており、庄内式併行期から布留式前半の時期が与えられてい

る。⁽⁷⁾

今回出土した製塩土器については、その出土状況から考えて、他の伴出した遺物と大きな時期差を有するものとは考え難く、むしろ同時期の所産である可能性が強い。このことは、淡路地域において、今回出土したタイプの製塩土器の初源が庄内式併行期にまで遡り得る可能性を示唆するものであり、今後の類例の増加に注意を払う必要があるものと思われる。

註(1)櫃本誠一・松下勝『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社 1984

(2)浦上雅史氏のご教示による。

(3)松下勝ほか「北淡路の遺物」『兵庫考古』第9号 兵庫考古研究会 1980

(4)浦上雅史氏のご教示による。

(5)浦上雅史「淡路島の海の生産用具」『歴史と神戸』第143号 神戸史学会 1987

田村昭治「旧城内遺跡」『淡路考古学研究会誌』第2号 淡路考古学研究会 1974

『山下町居屋敷遺跡発掘調査報告書』 洲本市教育委員会 1977

(6)(5)に同じ。

(7)松下勝ほか『播磨・長越遺跡』 兵庫県教育委員会 1978

3. 小代呂遺跡

1. 所在地 兵庫県津名郡北淡町野島

2. 遺跡の概要

小代呂遺跡は、北淡町野島の播磨灘に面した海岸線に位置する。標高150mの丘陵上から56個体にのぼる製塩土器が出土している舟木遺跡とは直線距離にして約2kmの位置に存在する。現在、知られる限りでは最も近い製塩遺跡である。

本遺跡は、昭和60年、水産加工場の敷地を拡張するために水田を削平した際、甕、鉢等とともに製塩土器が出土し、遺跡の存在が知られるに至った。当時、淡路考古学研究会の波毛康宏氏らによって採集された遺物が存在するのみで、その後詳細な調査は実施されていない。採集された遺物も、削平された土砂中より回収されたものであるために、共伴遺物と製塩土器との関係などは明らかでない。現在の遺跡の状況は、水産加工場裏の削平された断面で遺物包含層が確認できる。

3. 出土遺物

製塩土器は数点が採集されているのみである。いずれも胴部を欠き全体像は不明であるが、すべて脚台の付くタイプである。

安定した大型の脚部から直立気味に立ち上がり細長いシリンダー状の胴部をもつと考えられるタイプⅠ（9～11）と、外方向へ広がる脚部から大きく開きやや内湾気味に斜め上方へ立ち上がる胴部をもつと考えられるタイプⅡとに大きく分類される。さらにタイプⅡは、脚部の径が4cmを超えるⅡa（6～7）と、脚部が小型化した4cmに満たないⅡb（8）に分かれる。タイプⅡの胴部外面には叩きが観察できる。タイプⅠが3個体、タイプⅡaが2個体、タイプⅡbが1個体出土している。脚部の径は、タイプⅠが約5.2～5.5cm、タイプⅡaが約4.5cm、タイプⅡbが約3.5cmを測り、タイプⅠからⅡa、Ⅱbへと小型化する傾向にある。

これらタイプの差は時期差を反映したものと考えられ、少なくともタイプⅠ・Ⅱに代表される2時期の土器が存在する。また、タイプⅡa・Ⅱb間の差も時間的な経過を反映したものである可能性はあるが、個体差の可能性もある。

4. 小結

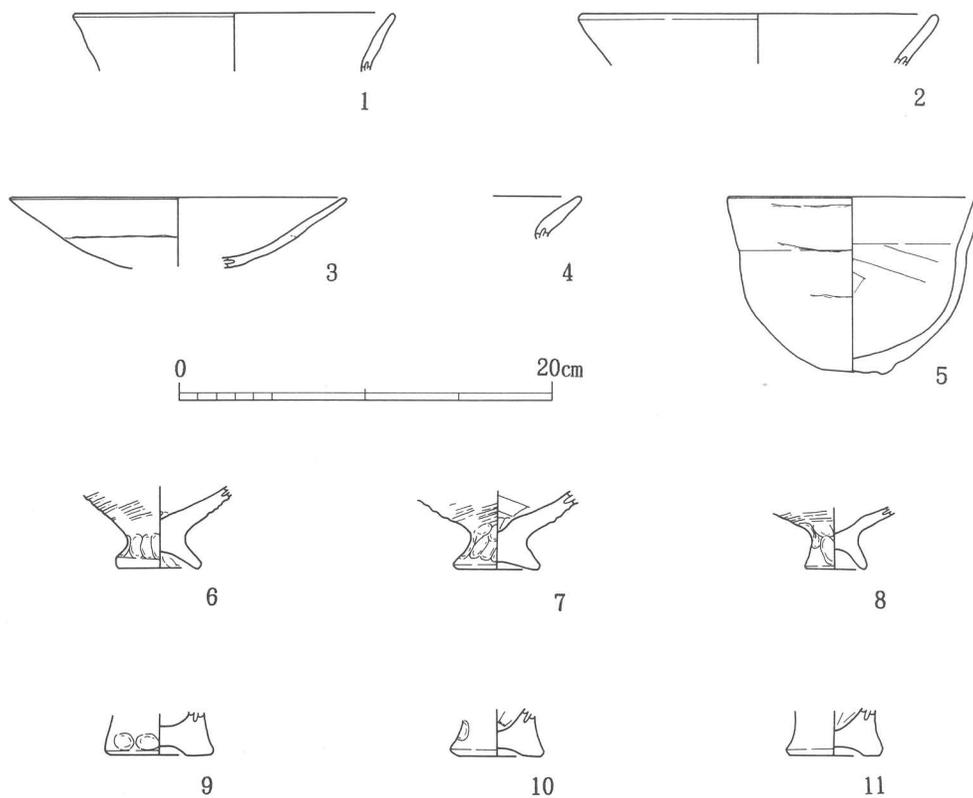
北淡路で出土する製塩土器は、北淡町の浜田遺跡等から出土するような厚手粗製の丸底碗型を呈するものが大半で、伴出した遺物から7世紀前半頃の時期が与えられている。

本遺跡で採集されている製塩土器はそれらの丸底化した土器に先行するものであり、現在北淡路で出土している製塩土器としては、最も古



第21図 小代呂遺跡の位置

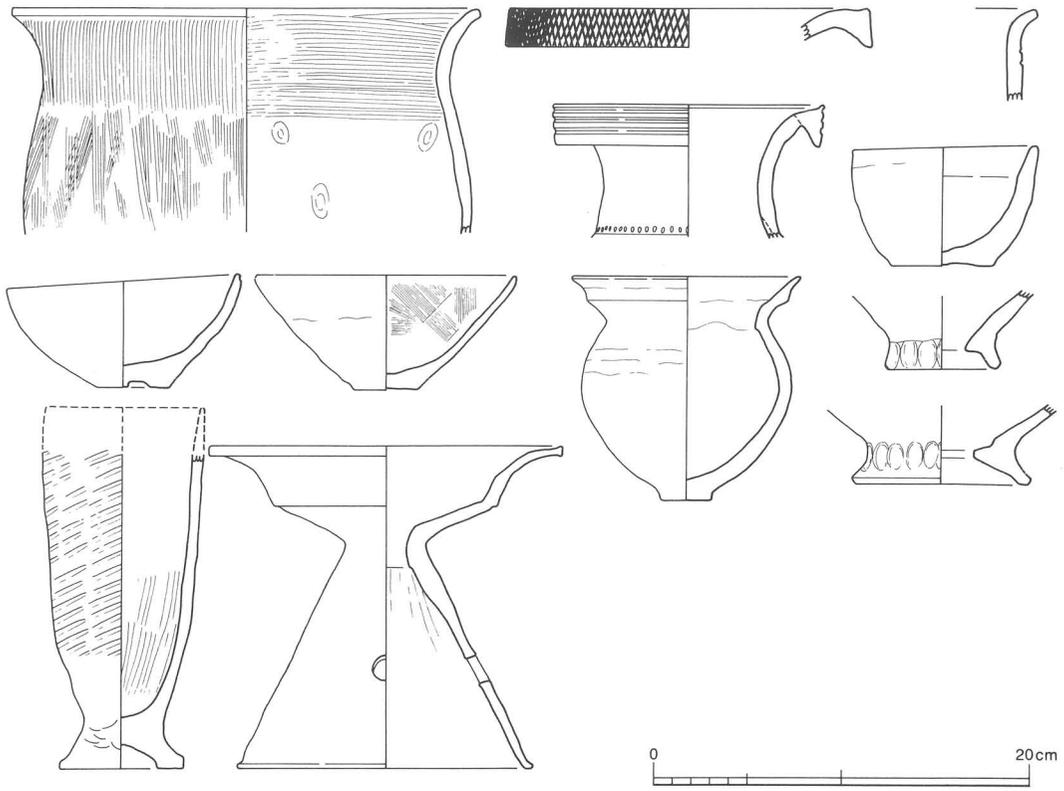
い段階のものに属する。現状では、遺跡の詳細な状況は不明であるが、北淡路に於ける初源期の製塩の状況を解明する遺跡として貴重な遺跡といえよう。



第22図 小代呂遺跡 土器実測図

4. 今出川遺跡 東浦町久留麻

東浦町の小平地の中で、浦川と今出川に挟まれた箇所が一番広い。今出川は県道仮屋北淡線に沿って北側を流れている。白山から、流れてきた今出川が平野に流れ出る七尋池の南東部に今出川遺跡がある。東浦中学生であった相田恵三郎君が採集した弥生土器は、前期後半から中期前半のものである。その弥生土器に混じって、口縁端部が少し欠けたほぼ完形に近い脚台付きの製塩土器があった。器形は細長く立ち上がるコップ状で、外面は幅の広い右上がりの叩きを持ち、内面の上半はナデで仕上げ、下半は器壁を薄くするためヘラ状工具で削りとっている。今出川遺跡の製塩土器は淡路としては、古いタイプのものである。しかし、出土状態などについては不明で、同時に採集された弥生土器との関連も不明である。



第23図 今出川遺跡 土器実測図

5. 楠本塩入遺跡 東浦町楠本塩入

1. 遺跡の立地

この遺跡は淡路フェリーの須磨行き港である大磯港から南部約800メートルに位置する。昭和45年、国道28号線に沿った花卉栽培用の温室を建設時に製塩土器が大量に出土した高田成樹・岡本稔氏によって楠本塩入遺跡と命名された。

大磯港は、10数年前、埋め立てられたので、それ以前は海岸線から数メートル以内にあったと推定される。

2. 調査に至るまでの経過

昭和53年度のは場整備にあたって、排水路の工事中に多量の製塩土器が発見された。発見した東浦町地域センター所長（当時）高田成樹氏と淡路考古学研究会および兵庫県教育委員会で協議した結果、緊急に排水路の土層図・写真を記録することになった。おくれればながら、淡路考古学研究会のメンバーによって、ほ場整備事業全域を分布調査することになった。

『遺跡地図及び地名表』（兵庫県教育委員会編昭和47年発行）に記録されている「楠本塩入遺跡」は、温室建設中に製塩土器が出土し、遺物包含層が確認されていた。その製塩土器は古墳時代後期の丸底の粗製土器である。そこで、岡本稔淡路考古学研究会会長（当時）を団長とする調査団をつくり、周知の遺跡と今回発見された遺物包含層との関係を明らかにする予定で発掘調査にのぞんだ。

3. 調査の経過

昭和53年、ほ場整備にともなう発掘調査を実施した。温室の北側をA地区、さらに北側をB



第24図 楠本塩入遺跡の位置と調査地点

地区とした。まず、A地区の2号排水路であるが、工事予定では、東西に100メートル掘ることになっている。そこで

東半分の耕作土をはぎ、その下の灰黄色砂質土（床土）を除くと遺物包含層があらわれた。

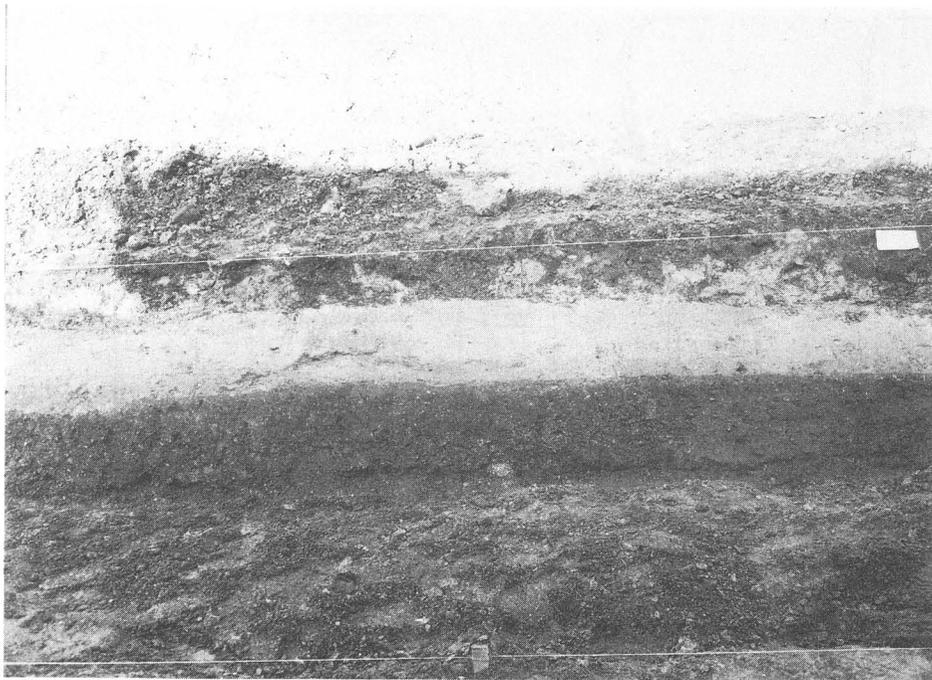
遺物包含層は、2～3層である。その下は淡黄色の砂で、当時の地山と考えられ、海岸線に接する浜辺において土器製塩が行われたことを物語っている。

遺物包含層からは、須恵器の坏が出土した。この須恵器は6世紀後半のもので、製塩土器も同時期と思われる。

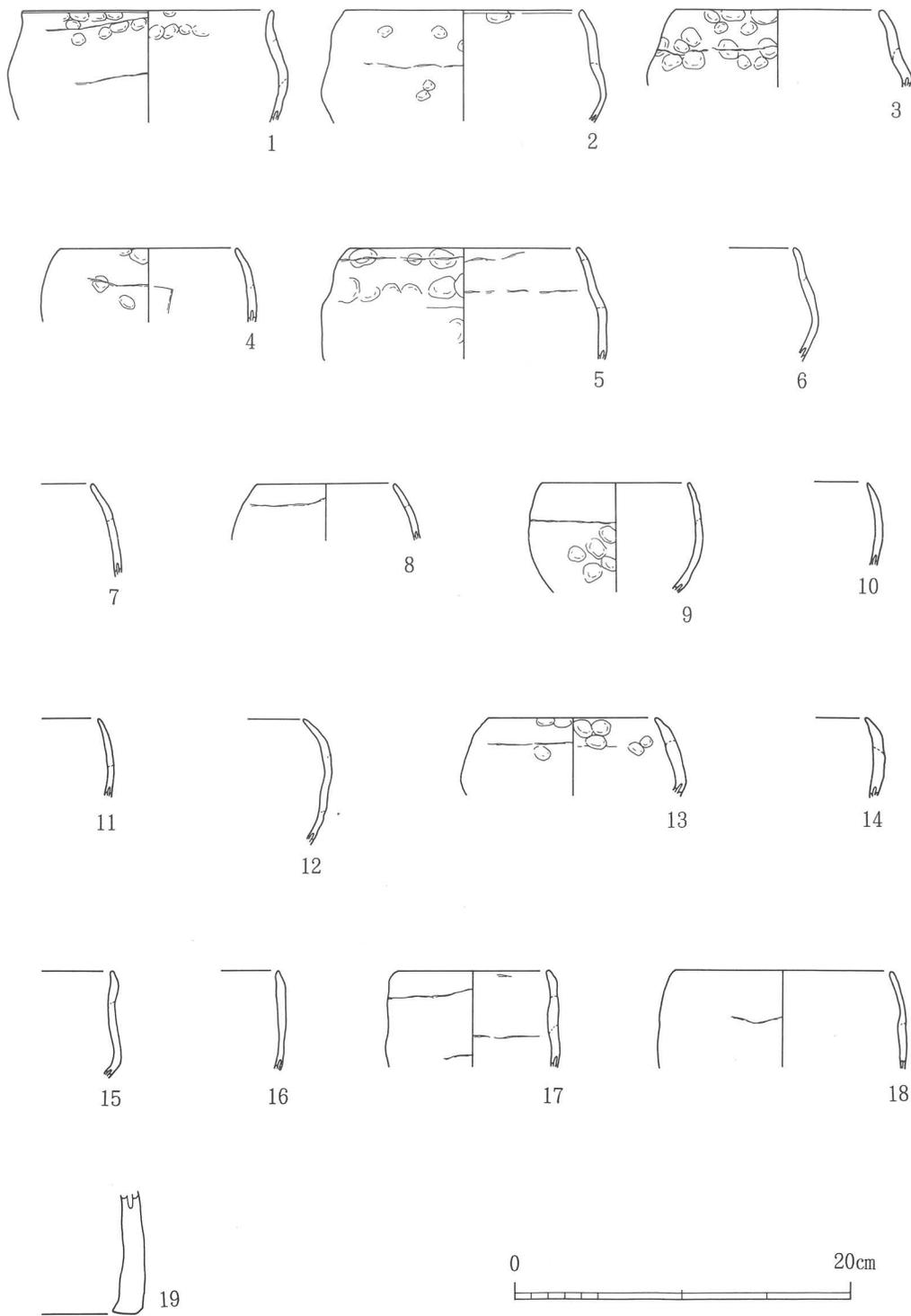
掘削された排水溝の断面の遺物包含層は、長さ10数メートル単位で数箇所幅1メートルの土器包含層がみられた。なお、西側（山側）には、22メートル以上の包含層はないことが確認された。

しかし、遺物は多量に出土するが土器製塩に関する生産遺跡は検出されなかった。すなわち、土器製塩をしたと思われる製塩炉址や粘土敷などの発見はなかった。ただ、炭や焼石等が製塩土器とともに出土したことから、近くに炉址などがある可能性を考えさせる。

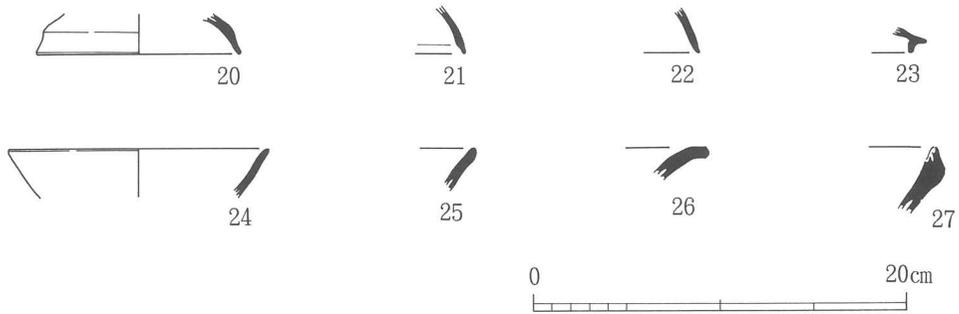
この遺跡で出土した製塩土器は丸底の粗製土器で、外面は指押さえのみで、指紋跡もあり、粘土紐の接合部分も残っている。内面はナデて仕上げている。古墳時代後期の時期である。



第25図 楠本塩入遺跡 土層



第26図 楠本塩入遺跡 土器実測図(1)



第27図 楠本塩入遺跡 土器実測図(2)

4. 遺跡の意味

発掘調査によって、多量に製塩土器が出土したことから、淡路の土器製塩のなかで、古墳時代後期の最盛期を思わせる。すなわち、楠本塩入遺跡が淡路の東浦海岸で土器製塩が大量生産された時の中心的な遺跡のひとつであると考えられる。

6. 井上遺跡 東浦町浦井上

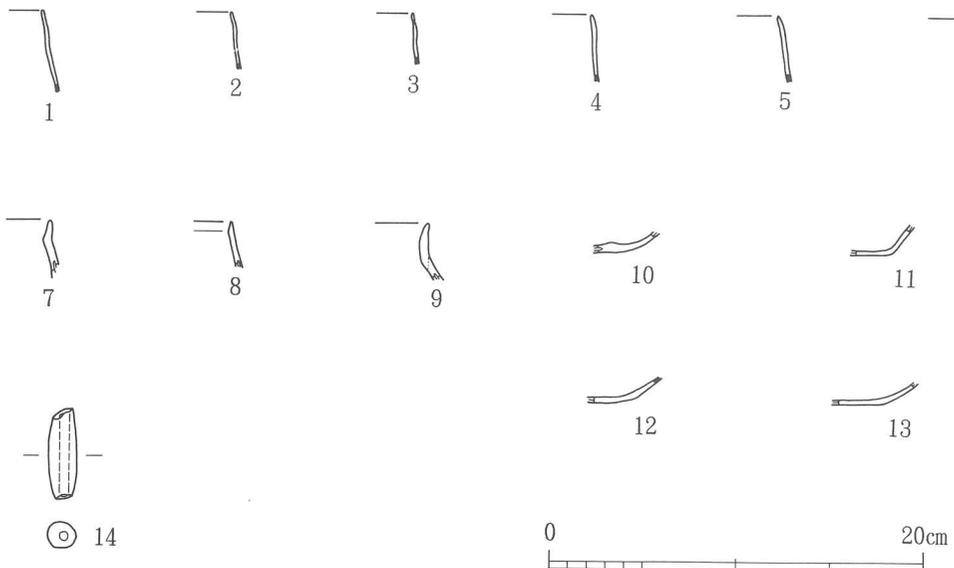
(1)遺跡の立地

東浦町の平野部は、北から楠本・浦・久留麻と続くが、この遺跡は海岸線から200メートル入ったところである。標高3～5メートルの低地で、西側の丘陵部は7～8メートルである。北側には、楠本塩入遺跡、南側には、平松遺跡がある。

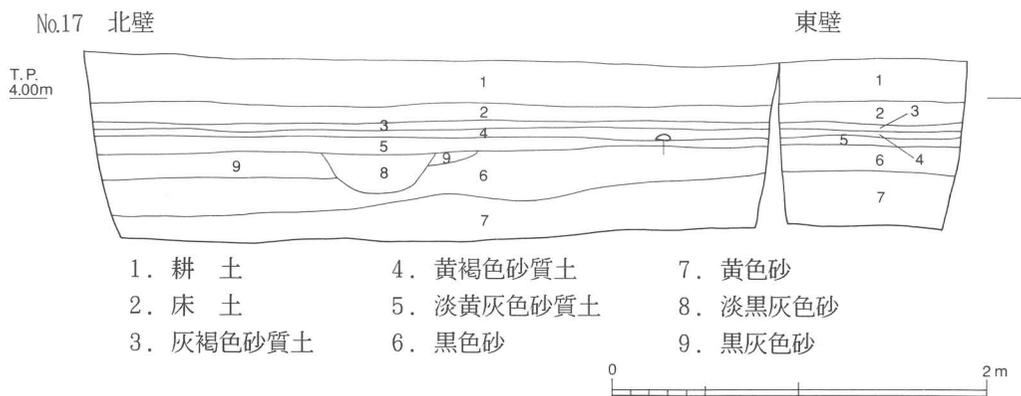
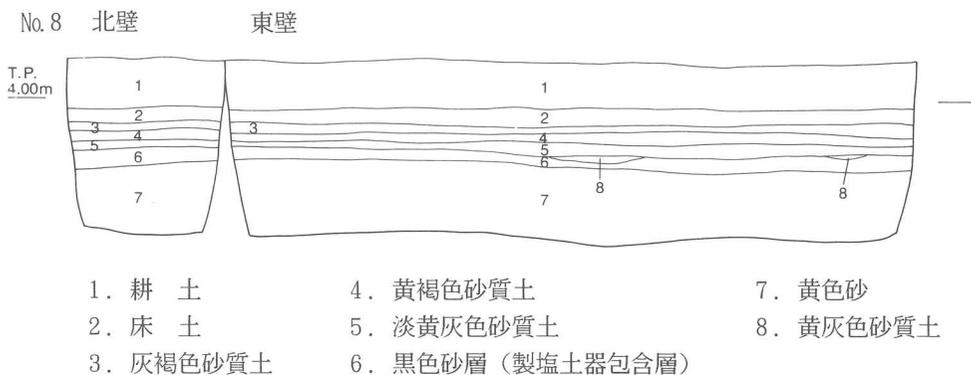
(2)調査の経過および結果

したがって、その間に挟まれた井上浜で、農業基盤整備のため遺跡確認のためのツボ掘り調査をおこなったが、昭和58年12月23日～27日に井上の北部を17箇所ツボ掘りした。1×4メートルのツボを設定した。最初設定した16箇所のツボのうち、製塩土器が出土したのは、No8とNo10の2つのツボのみで、No10の製塩土器は少量であったが、No8のツボでは製塩土器が多量に包含する黒色砂層が検出されたので、新たにNo8と直交するNo17のツボを設定し、多量の製塩土器が出土したが、遺構は検出されなかった。この遺跡の出土品は、薄手で堅い小型の丸底の製塩土器で、洲本市の名子の浜で出土しているものであり、丸底Ⅰ式といわれる小型のものである。井上遺跡では、他のツボで、緑釉土器の破片が出土している。この遺跡は、兵庫県教育委員会との協議の結果、農業基盤整備が遺跡を破壊しない高さの程度にとどめて保存するというので、決着した。

なお、井上遺跡に接した南部も昭和62年に発掘調査を行った。小字としては井上・平松であるが、他の遺跡とまぎらわしいので、「猪ノ尻遺跡」と命名し17箇所のツボを掘ったが、No7の攪乱層で製塩土器が出土したのみであった。



第28図 井上遺跡 土器実測図



第29図 井上遺跡 土層断面図

V. 淡路島の土器製塩実験について

淡路島の海岸部には弥生時代から奈良時代にかけての製塩土器片の散布がみられる。

また、島内各地で行われた発掘調査でもこれらの包含層が確認され多数の製塩土器片が出土しており、古代この地で塩づくりが盛んにおこなわれたことが判る。

しかし現在までのところ淡路島内では土器製塩にかかわる遺構が確認されておらず、その製法については不明な部分が多い。

そこで実験によって土器製塩技術を解明する試みを、淡路考古学研究会の岡本稔氏や波毛康宏氏を中心にして、洲本市名子ノ浜など製塩土器片の出土した海浜部などで、いくたびか試みた。その結果、土器を使用した製塩法をある程度の段階までは再現することが出来た。

この報告は、その成果にもとづいて1987年8月淡路文化史料館において一般市民も参加して行われた塩作りの経過である。

作業は、製塩用の土器作りから順を追って行われた。

- 1 土器は「脚台型」や「丸底型」など弥生時代から奈良時代までの製塩土器を模倣して、手ひねりの技法で作成し、陰干しで二週間乾燥させる。

土器の焼成は俗に「野焼き」と呼ぶ方法で地面に直接土器を並べて焼き上げる。

- 2 まず木材を燃やして熱した地面にわらを燃やして「火床」を作る。
- 3 その上に土器を並べ、再びわらで覆い30分燃やし続ける、この作業は、土器に急激に高温を加えた場合土器の胎土の表面と内部の膨張差が大きくなり破損しやすいので、わらの比較的低い燃焼温度で緩やかに膨張させて、高温になじませるためである。(第30図)
- 4 わらが燃え尽きた後、土器の並びをととのえ、周囲を木材片で覆い火を燃やす。
2時間ほど燃料を補充しながら加熱を続ける。(第31図)
- 5 消火後、自然冷却を待って土器を取り出す。



第30図 製塩実験風景



第31図 製塩土器作り

土器製塩の作業

- 1 予め、海水を天日で濃縮し、さらに鉄釜で加熱し水量が $1/5$ 程度になるまで煮詰めた塩水を作る。
- 2 平坦な地面にわら、木材、木炭を重ねて燃やす。木炭は二層以上積み重ねると火力が持続して保たれるので補給が少なく済む。
- 3 木炭に完全に火がついた状態で、土器をその上にしっかりと安定させて並べていく。
- 4 柄の長い杓を作り、濃縮させた塩水を土器内に $1/2$ 程度注ぎ込む。この量は塩水が沸騰したとき土器から溢れさせないためである。(第32図)
- 5 塩水が白く泡立ち沸騰する。水量が土器の底部まで減少したら新たに塩水を加える。この作業を繰り返しながら、次第に濃縮させていく。この際、土器が一定の場所にあるとこの木炭への空気が遮断され火力が低下するので、時々土器を火力の強い場所に移動してやる。(第33図)
- 6 土器の内部に数mm～1cm程度の塩が白く付着し始めたら、加水を停止し残りの水分を完全に蒸発させ、自然冷却をまって塩を採取する。(第34図)

今回の実験の結果、木炭を燃料とした場合、製塩土器の形状は丸底型が脚台型に比して、相当多量の塩が採取できた。

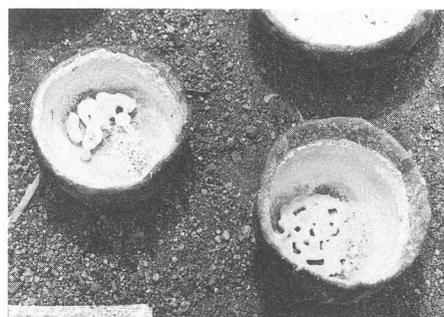
弥生時代から始まる古いタイプの脚台型の土器は、燃料に木材の炎を使用した時代には熱の当たる表面が大きいので、熱効率が良く、炎の煤も内部に入りにくい構造である。丸底の土器は、燃料に木炭を使用するようになった時代に登場し、底部の熱効率を高めたと思われる。そして木炭と丸底型の土器によって塩の生産は飛躍的に増大したであろう。この実験によって製塩土器の形状の変遷が、燃料の変化に合わせた



第32図 製塩実験風景



第33図 製塩実験により作られた塩



第34図 製塩実験により作られた塩

ものであることが推測できた。

今回の実験での問題点は、当時の海水の濃縮法は解明されておらず、土器製塩に必要な濃縮した塩水を効率的に得るために、海水を鉄釜で一気に煮沸濃縮した点である。

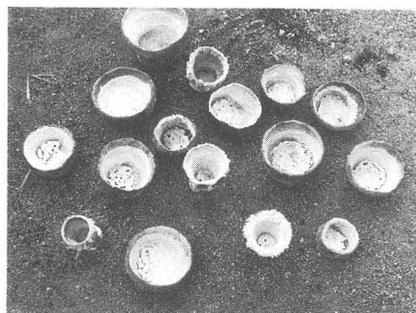
『万葉集』には、当時の製塩作業の情景が、「藻塩焼く……」と歌われている。

他所の実験では、この歌をヒントに海草「馬尾藻」を浜辺に吊るして、海水をふりかけ乾燥させる作業を再三繰り返しつつ塩を付着させ、それを燃やした灰を海水に混ぜて濾過した濃縮液を用いて、好結果を得ているという。

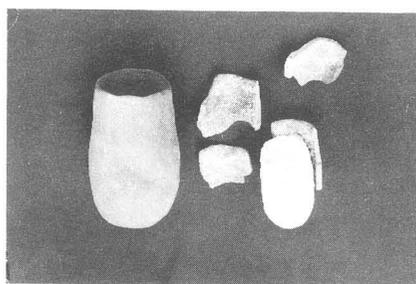
今後、当地でもこの方法に取り組んでみたい。

近年、実験考古学を利用して古代人の生活を体験学習する催しが各地で開催されている。淡路島西淡町では、古代の塩作りを当地の「沖の島古墳群」とリンクさせて、村起こしのイベントにとりいれて話題作りをおこなっている。

この実験の後、岡本稔氏は名子の浜、高崎海岸などから採集された薄手丸底コップ形の製塩土器に用途に注目し、実験によってこの土器がいわゆる「かた塩」生成に用いられた可能性を実証した。すなわち煎熬用の土器で海水をシャーベット状にまで煮詰めた段階で、この容器に移して2時間程度加熱して水分を除いた後、土器を割って固形塩を取り出す。この固形塩は、そのまま保存しても再度水分を吸収して潮解現象を起さないで、長時間保存と移動に適している。(第36図)



第35図 製塩実験により作られた塩



第36図 かた塩

VI. は

公開していません

Ⅶ. おわりに

淡路の生産遺跡調査すなわち製塩遺跡の調査は、3年間、まず北淡路の海岸線を分布調査することによって、一応まとめることができた。編年作業や研究のまとめは、岡本稔氏や浦上氏が今後より詳しく発表される予定であるが、ここに不十分ながら、製塩遺跡の北淡路版としてまとめておいた。今後の課題として、表面採集や偶然の発見ではなく、学問的な発掘調査によって、製塩炉址すなわち石敷きまたは粘土敷きのような遺構が検出されるか、製塩土器とともに伴出される土器で時期を決定するものが出土することを期待したい。さらに層位的に時期の差が確実に分類できることができれば、より確実なデータがえられ、編年作業がたしかなものになるであろう。

なお、土器製塩では、まず、海の水をそのまま製塩土器に入れて熱を加えても塩は作れない。そこで、海水を濃縮して鹹水にして、それを土器に入れると、塩が生産できる。鹹水を取ることを採鹹と呼んだ。採鹹の過程で、藻を利用するといわれてきたが、まだ淡路では実験に成功していない。万葉集などでは、「藻塩焼く」とか、「藻塩垂る」とかいわれて、藻に海の塩水をかけたり、藻を焼いてその灰で鹹水をつくるとかいわれているが（若狭や伊勢）その点に関しては、よくわかっていない。また、一定の場所に海水をためて、天日で乾燥させていたとも考えられる。なお、「鹹水ため」が遺構として確実に表れるのは、平安時代以降である。いうまでもなく、製塩土器は、その後の煎熬工程で登場する。われわれが淡路でやった土器製塩実験は、あくまで、煎熬工程である。そして、最初は、小規模なものから、だんだん、大量生産されていくようである。

図 版



淡路町 岩屋・松帆周辺 空中写真



北淡町 野島江崎周辺 空中写真



北淡町 野島墓浦周辺 空中写真



北淡町 富島周辺 空中写真



東浦町 楠本周辺 空中写真



五色町 都志周辺 空中写真



淡路町 岩屋海岸



北淡町 江崎海岸



北淡町 野島海岸（貴船神社前遺跡）



北淡町 育波海岸



東浦町 浦川



東浦町 今出川河口付近



一宮町 江井海岸



五色町 都志海岸



津名町 埋め立て地付近



津名町 佐野海岸



五色町 鳥飼海岸



五色町 五色浜



浜田遺跡 全景



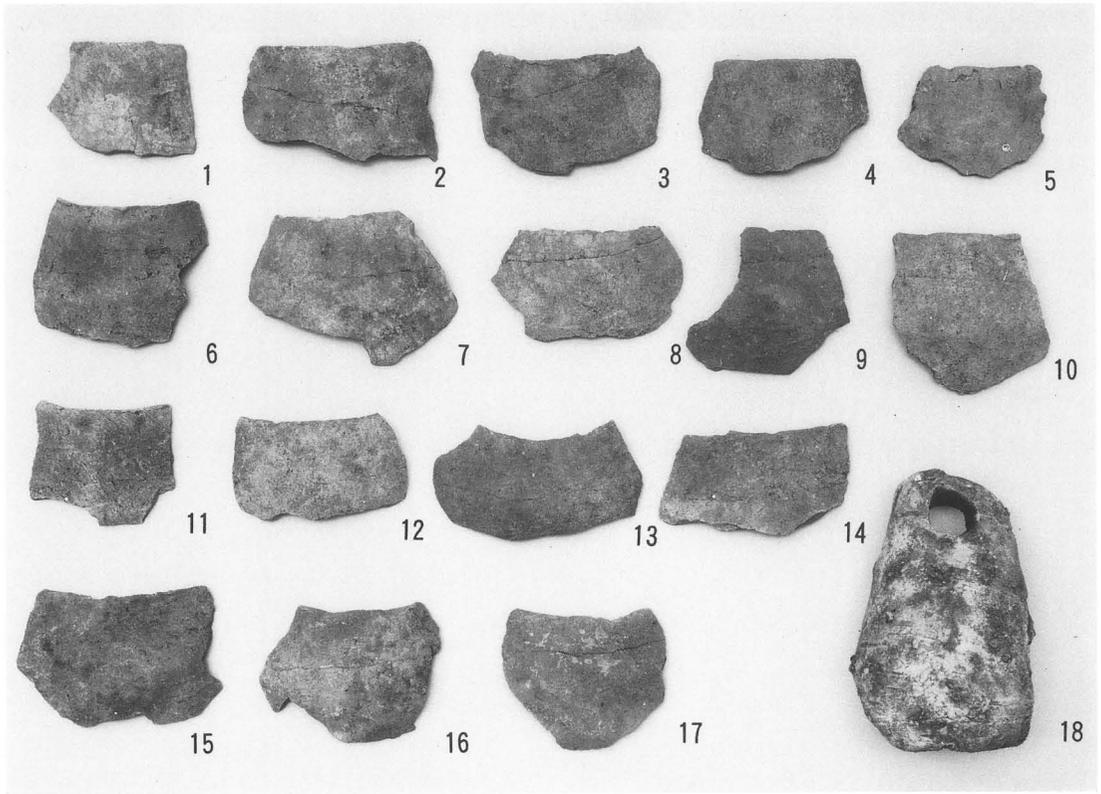
浜田遺跡 1 グリッド



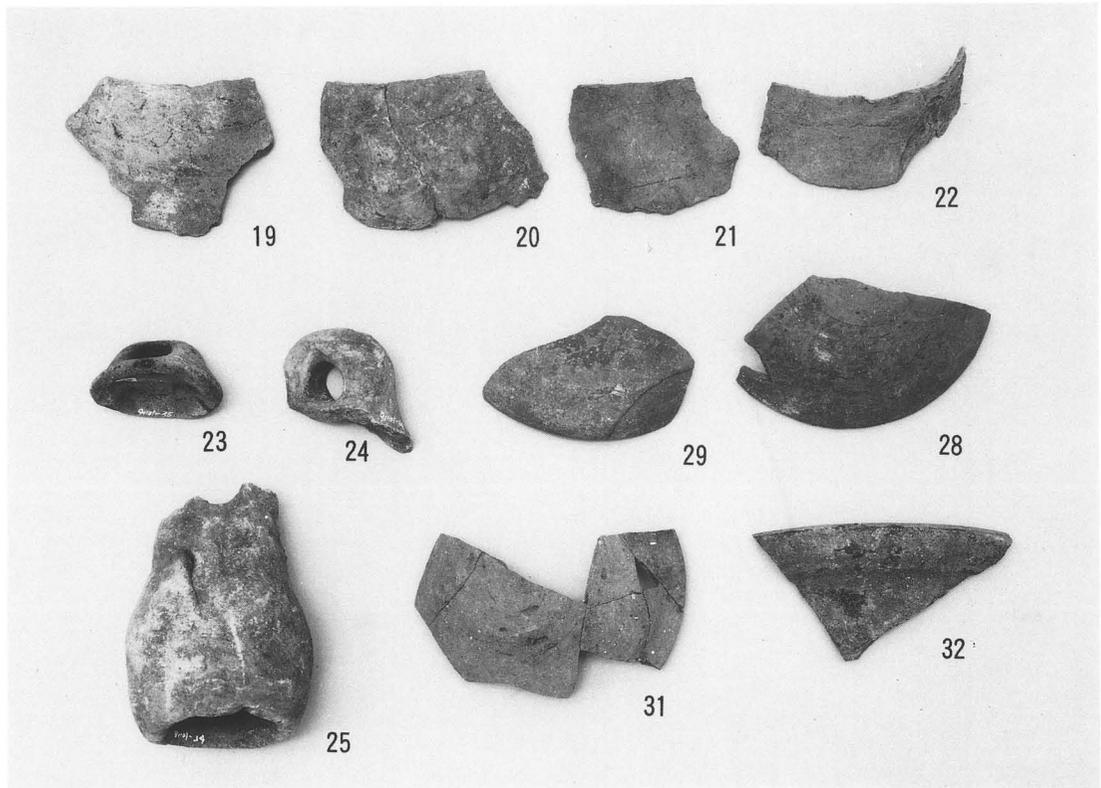
浜田遺跡 2グリッド 北壁



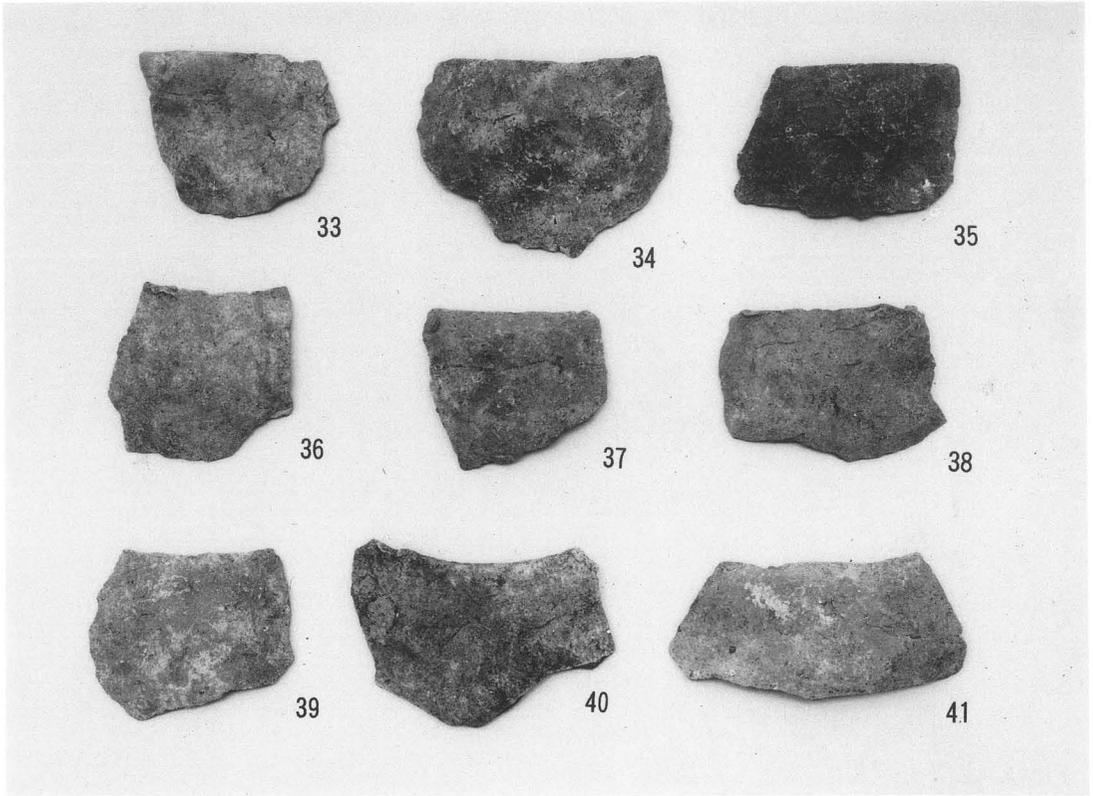
浜田遺跡 2グリッド 全景



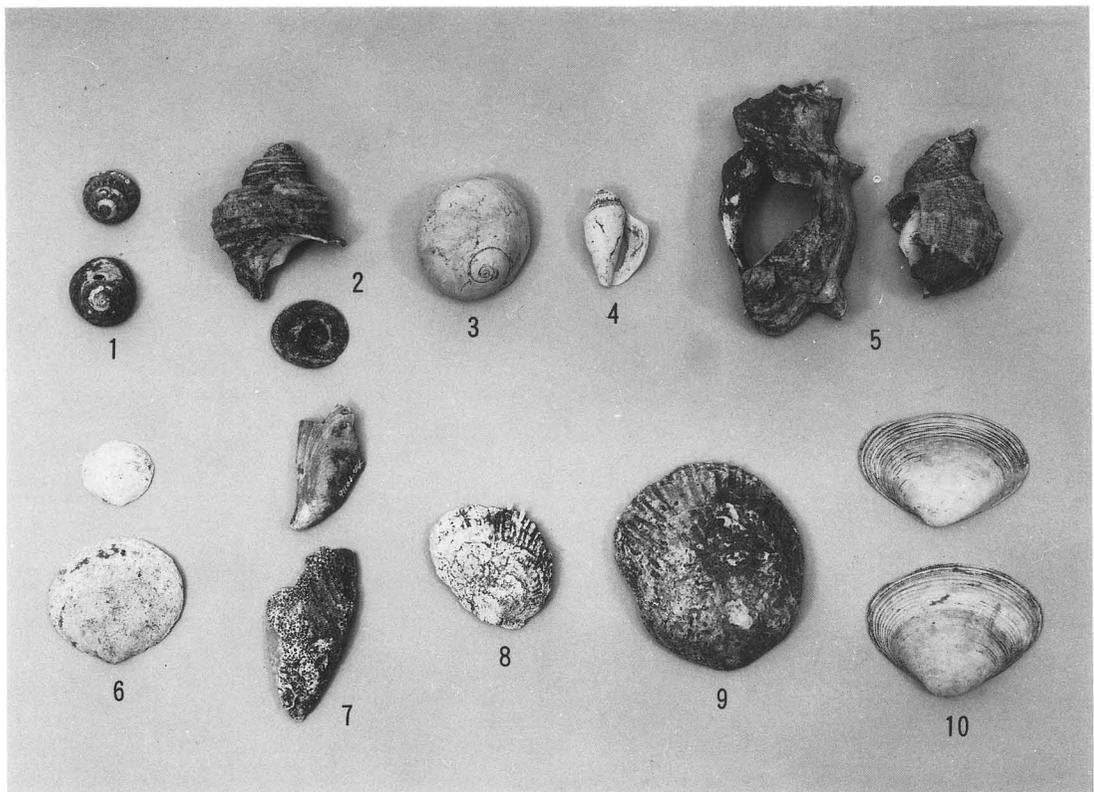
浜田遺跡 出土土器



浜田遺跡 出土土器



浜田遺跡 出土土器



浜田遺跡 出土貝類



舟木遺跡 全景



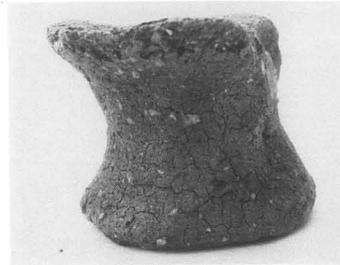
舟木遺跡 住居跡



10



11



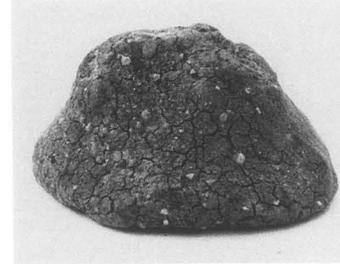
12



13



14



15



16



17



18



19



20



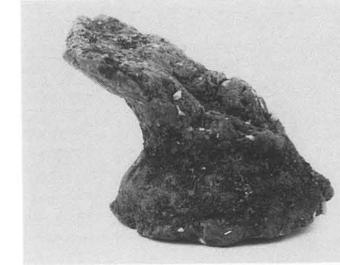
21



22



23



24

舟木遺跡 出土土器



小代呂遺跡 全景



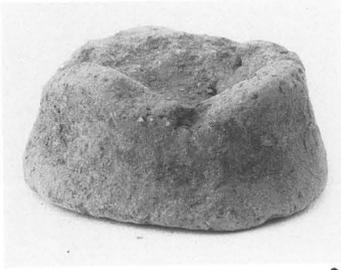
6



7



8



9



10



11

小代呂遺跡 出土土器



今出川遺跡 全景



今出川遺跡 分布調査風景



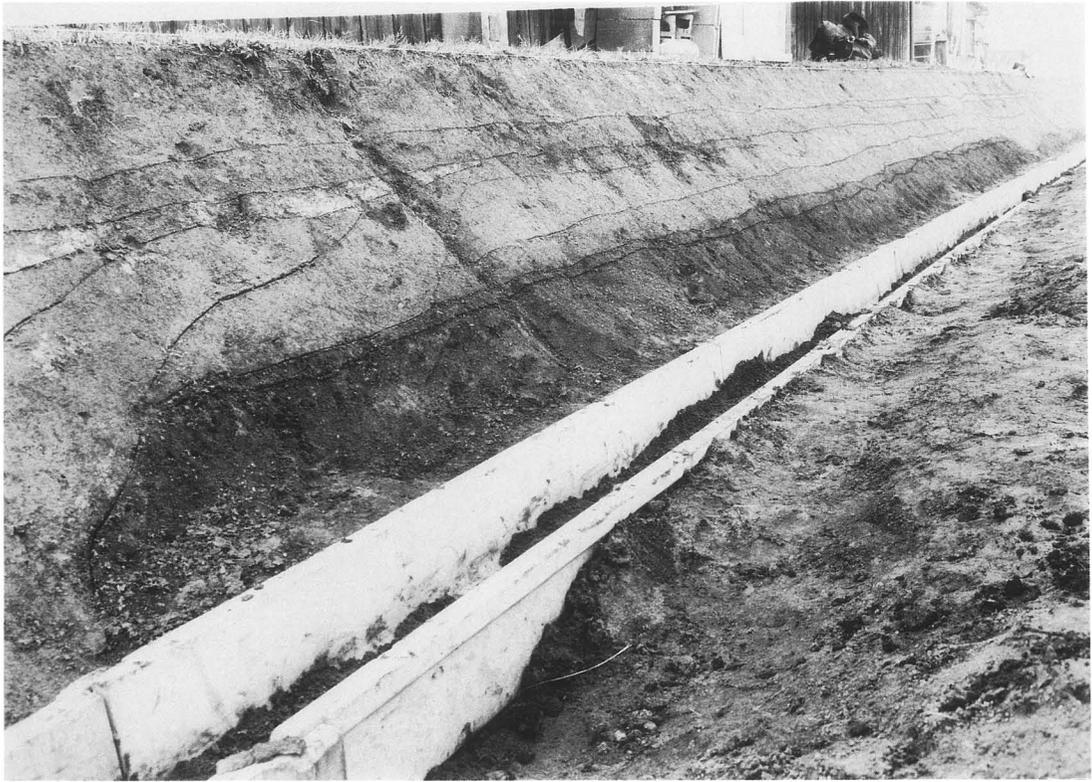
今出川遺跡 出土土器



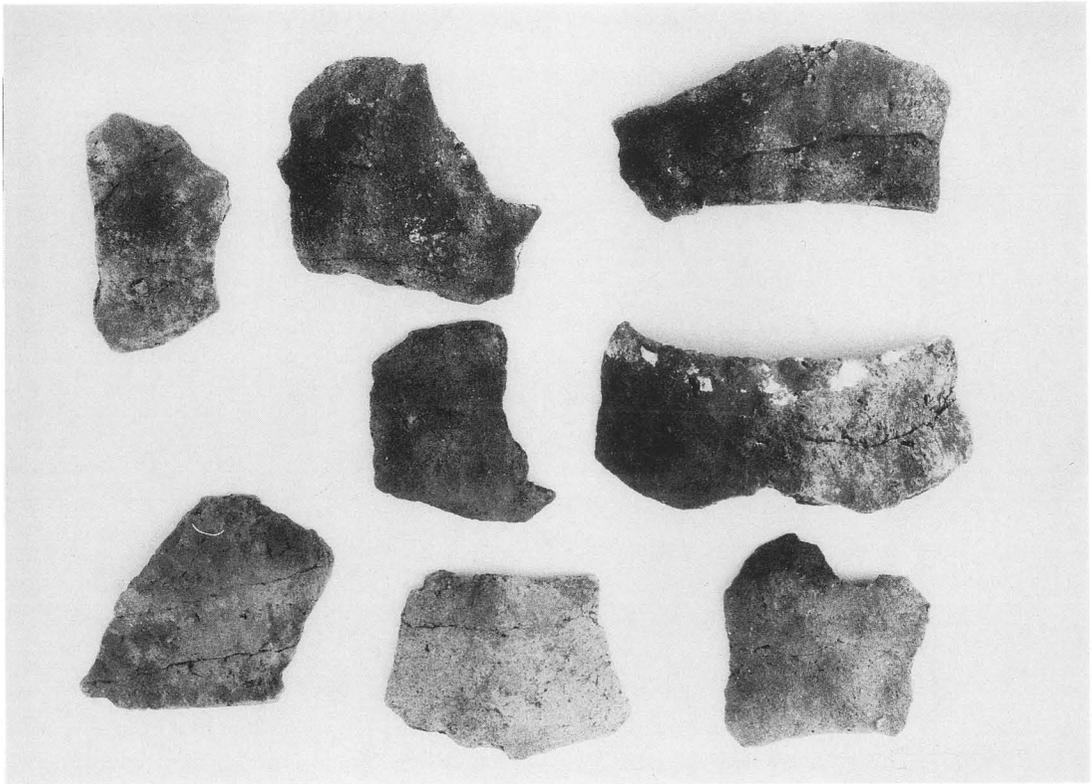
楠本塩入遺跡 全景



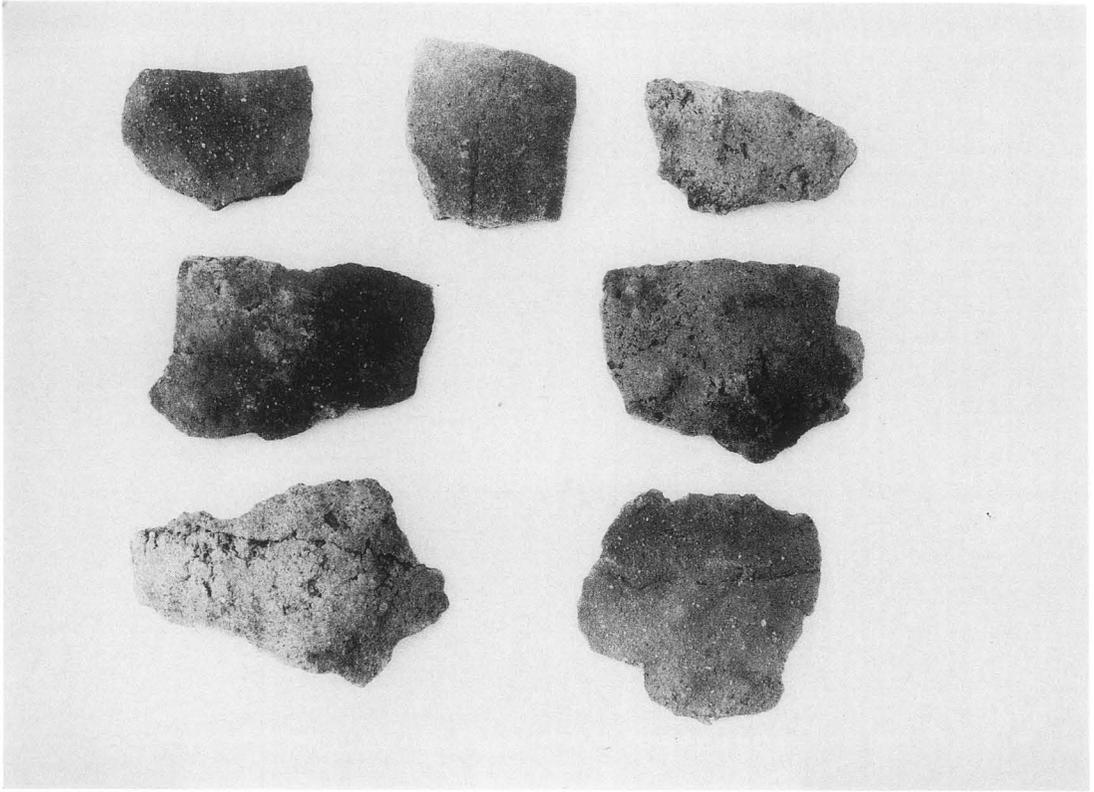
楠本塩入遺跡 全景



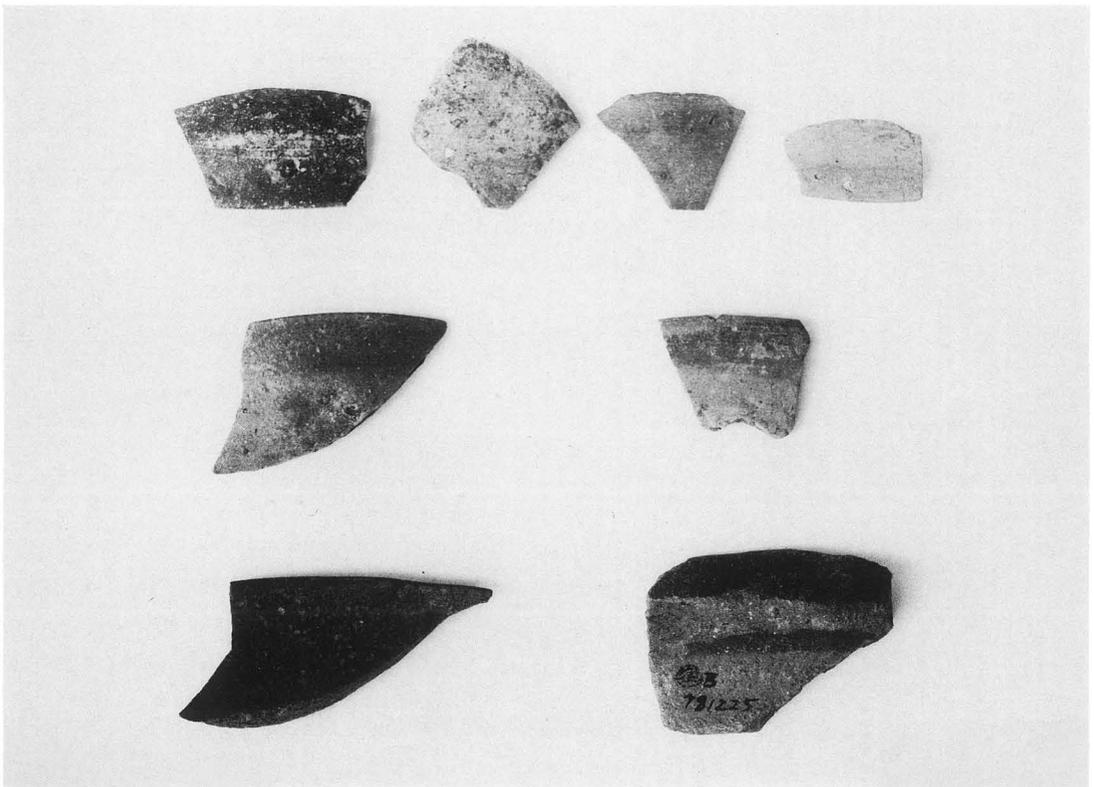
楠本塩入遺跡 堆積状況



楠本塩入遺跡 出土土器



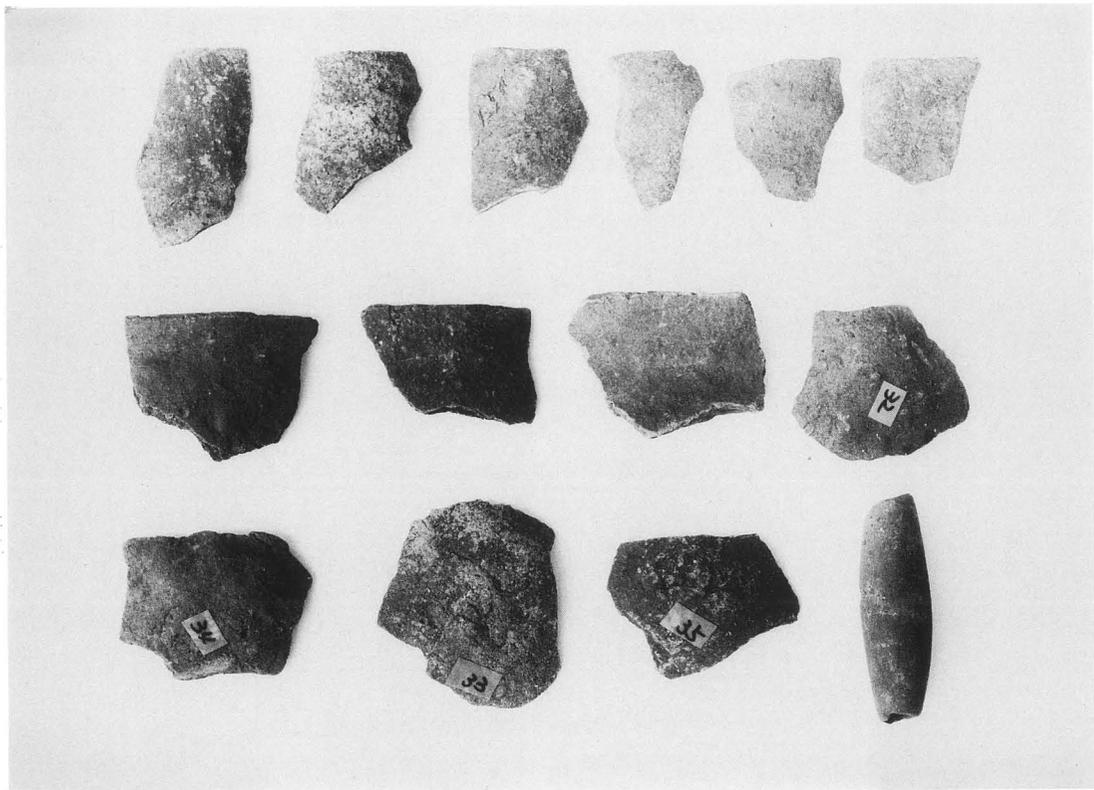
楠本塩入遺跡 出土土器



楠本塩入遺跡 出土土器



井上遺跡 全景



井上遺跡 出土遺物

兵庫県生産遺跡調査報告 第2冊

1993年3月31日発行

製塩遺跡Ⅰ
(津名郡)

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL 078 (341) 7711

印刷 日新堂印刷株式会社
〒650 神戸市中央区橋通1丁目1-9
TEL 078 (341) 2241
